
死と水

蒼幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死と水

【Nコード】

N9916K

【作者名】

蒼幻

【あらすじ】

祖父がその死に際して水を求めた意味とはなにか？

死と水という親和的な二つの事物を結びつけて考えてみたいと思い、書き始めた物語です。

岩と岩とに挟まれた隙間から落ちてくる水の勢いは凄まじかった。どどどどどと息もつかせぬペースで流れ落ちる水に、その偉大さを思っただけで恐怖した。自然の造形物である滝がこんなに力強いものだと。落差十メートルを超えるここは 倚天の滝 と云うらしい。わざわざ岐阜まで来た甲斐があつたというものだ。一緒に来た祖父はこの滝を見慣れているのかそれほど感動している様子はなかった。が、その力強さを眺めることに吝かではないらしく、頻りに溜息をつきながらまるで往年のスターを眺めるような具合に熱い眼差しを注いでいる。

ここは冬の寒い時期を選んで近隣の坊さんたちが荒行をすることでも有名だった。力強い流れは人を寄せ付けない厳格なものである。滝壺に入ってこの勢いの滝に打たれることがどれほど辛く酷いものであるか、それを思っただけで伊佐雄は怯えた。冬にこんなところで修業したなら、自分などいっぺんに心臓が止まってしまうにちがいない。そんなふうを考えて背筋をぶるつと震わせる。

「伊佐雄、ここに立ってみなさい」

祖父が声を掛けてくる。手にはカメラを握っている。デジタルカメラ全盛のこの時代に何万円したかわからない高価な一眼レフカメラ。祖父は滝の全景が写せるように数歩離れて伊佐雄に焦点を当てる。

「はい、笑って」と云われていきなり笑うのにも抵抗があり、顔が引きつる。

カメラのシャッター音がして祖父はきっかり二枚撮影した。

「よし、いいぞ」

カメラのレンズに保護カバーをつけ、また首から下げる。

源一は唯よりも伊佐雄を可愛がっていた。普通祖父なら女の子を、祖母なら男の子を可愛がるものなのにどうしたことだろう。中学生である伊佐雄と融通のきかない小学生である唯とでは、一緒に連れて歩くにしても勝手が違い過ぎることか。それとも男同士の方が気兼ねがなくていいということか。

「水滴が顔に当たって気持ちいいな」

祖父はそう云いながら皺のある顔をくしゃくしゃにする。

「うん、気持ちいいね」と伊佐雄も同意する。

水の粒は雲の切れ間から差ししてくる陽光を受けて白く輝いている。綺麗な水、美しい水、滝から流れ落ちる水は潭となっているその近辺の底を透かして見えるほどの透明度を誇っている。あまりの冷たさに魚たちも生きにくいだろうと思われるのにそんなことはまるでなく、イワナやウグイといった魚たちが銀鱗を煌かせて水の中を元気に泳いでいる。

「ここで釣りをしたら美味しい魚がたくさん獲れそうだね」

伊佐雄はそんな風に云ったが祖父は厳しい顔をした。

「伊佐雄、ここは霊場にもなっている神聖な場なんだ。ここでそういう殺生を指すような言葉を告げることは神仏の意に反することだと思わなければならない。確かに魚は綺麗かもしれない、美味しいかもしれない、飢えていたら、獲って食べたいと思うかもしれないでもこの魚は駄目なんだ。清まっている地での殺生は場を汚す元になる。気をつけんといかんよ」

祖父の目は真剣だった。伊佐雄に教え諭すように告げたその言葉は、有徳の士の警句のようにも思われた。伊佐雄は素直に納得する。祖父の云っていることの本質は半分もわからなかったが、どこことなく正しいことを云ってもらっているという感じがしたからである。祖父は伊佐雄にとってもうひとりの教師だった。学校にも教師はいるが、それは勉強の上での教師であって、生活全般に対する教師はこの祖父だった。祖父の言うことは一家言あり、祖父自身、図書館司書という立場を生かして沢山の価値ある本を読みこんでいた。し

っかりとした意見・主張を持っていて、祖父は伊佐雄にとってひとつの憧れだった。こんな大人になりたいというひとつの規範を示してくれる存在。それが祖父だった。

天気予報でも頻りに云われていたが、この中学の、祖父と一緒に岐阜へ旅した年は雨が少なく猛暑であろうとの予測が出されていた。太陽の熱線に晒されて熱い熱いと繰り返していた伊佐雄を見て、「それなら、わしがいいところへ連れて行ってやろう」と云う言葉とともに引きずられるように玄関を出て、JRの駅まで歩かされたのだった。

「暑い、どうしようもなく暑い」と云っていると、「しゃきつとせんか」と伊佐雄を励まし、電車の涼しい車内に入るまでぶつぶつ文句を云っていた彼を見て、祖父はなんと思っていただろう。

電車に揺られること一時間半。途中名古屋駅で乗り換えて、岐阜に向かつて進んだ。

その間も外はかんかん照りで、すべてが飴細工のようにぐんにやりと曲りそうで、臨界点を越えた原子炉のようなものを想起してしまう。そうするとますます暑くなる気がして、伊佐雄はそれに耐えきれず、憂鬱と困惑が同時に攻めて来たような気がした。

祖父は今日初めてここに立ったときと同じような感動の色をその表情に浮かべながら伊佐雄に告げた。「さて、行くか」

伊佐雄が祖父の方を見ると、祖父は指を上へ向けて「ほれ、そろそろだろう」と示した。伊佐雄はなんだろうと空を見上げて納得した。雨雲である。雲が最前から太陽を覆い隠して不気味にわだかまりはじめていたのである。祖父はいつから気づいていたのだろう。この滝の周りにいては、時間も場所も失念しさって自分の置かれている現状など振り返る余裕はないものと見受けられる。それでも祖父はその弊に流されることなく、ゆっくりと自分の周りの状況を察知していたのだ。伊佐雄はあれほどきらめいていた光と水の乱舞が今ではもう望めない物になっていることに気づかなかった自分の不

明を恥じた。さすが祖父だという気がする。年の功ってやつだろうか、と伊佐雄は思った。

緑が氾濫している参道を歩いて行く。いまにも雨が降り出しそうなほど大気は水分に飽和していた。はちきれそうなほど大きく膨らんで収縮してを繰り返しているようである。

「ねえ、お祖父」と伊佐雄は横を歩く祖父に話しかける。

「なんだ？」源一は訊ね返した。

「お祖父はいろんなものを見る気があるんだけど、俺の視野とお祖父の視野って違うものなのかな」

それはさっきの滝の前での雨雲の気配を察知した祖父のことを思っ
て訊ねた言葉だった。源一は「んー」と咽喉を鳴らしながら声をあげた。その目はあちこちを往還し、ひとつところに定まったと思っ
たら、また元のようにぐるぐると視線を辺りに散らしていくのだった。伊佐雄はそれがいつたいどういうしるしであるのか理解できなかった。自分一人がおいてきぼりにされているような意識に苛まれる。

「まあ、答えにくかったらいいよ」と伊佐雄は譲歩した。

「いや、答えにくいという訳じゃないんだがな」源一は云った。

「なら、どうしているんなことにそんなすぐに気づけるの？」

伊佐雄は再び訊ねる。

「現状に慣れてしまわないことだよ。どんなことでも初めて行う物事は慎重になるだろう？ 慎重さと云うのは、集中力と密接な関係にあるわけで、その集中力を常に張り巡らせた状態で物事に当たるというのが重要になって来る。慣れは倦怠とか慢心を引き起こすけど、慎重さというのはその反対の属性を持っている。細心や緊張といったものになるかな。そういう状態にあれば、もし何かあっても瞬時に対応できるし、精神的余裕も生まれるだろう。いいことづくめなんだよ」

「聞くとやるとでは全然違うんだらうね」伊佐雄は肩をすくめた。

「まあ。これも徐々に出来るようになっていけばいい」

「うん」

伊佐雄は落ち着いていた。祖父の言葉がとてもありがたいものかと思えて気が引き締まる。「今日はここに連れて来てもらってよかったですよ」伊佐雄は云った。

「そうか、それはよかった」源一はそう述べながら道を急いだ。

JRの駅までは来た時と同じ路線バスに乗つての帰路と云うことになるのだが、今度のバスが通るまでには四十分ほどあるといふので、近くの料理屋で食事をすることにした。茅葺の一軒家で蕎麦を出している店だった。看板には 長寿蕎麦 という名称が示してある。いかにも御利益のありそうな名前だが、源一は「狙い過ぎとるなあ」と不平を漏らした。それなら入らなければいいのに、と思いつながら、祖父が先頭で入つていくから自分も遅れないようにそれに従う。

「いらつしやいませ」と店の主人らしい、恰幅の良い四十代くらいの男性が接客に出てきた。「こちらの延命蕎麦というのが名物になつております」と主人は告げる。

「じゃあ、それを二つ貰おうか、両方、天婦羅と山芋を載せてくれるか」

祖父はこう云う店には慣れていいのか、メニューをろくすっぽ見ないで注文した。

さすが源祖父だなあ、と伊佐雄は思った。

「伊佐雄、こう云う店はな、なめられたらおしまいだ。客として入る時は、店の人間になんだこんなやつかと蔑まれたらおしまい、店の側からすれば、客になんだこんな店と卑しまれたらおしまいなんだ。いわば、これは目に見えない戦いのようなものなのさ」

「へえ」伊佐雄はそんな話はどうでもよかつたが、必要以上に、源一の言葉が熱を帯びているようなので、注意を喚起させられた。

名物と云うだけあって、蕎麦はうまかつた。

熱いダシに浸されていても最後までびなかつたし、歯ごたえは抜群で、蕎麦の風味も申し分ないと源一が感動したように云う。伊

佐雄はどんな蕎麦が上等で、どんな蕎麦がまずいのかわからなかったので、祖父の言葉をうのみにする。これがうまい蕎麦というものが、と意識の片隅に置きながら、汁を吸ってふやけはじめた海老天を一口齧る。

代金は二人で二千四百円であつたが、源一はその値段に別段驚きもせず、現金で支払う。店を出ると、雨の気配はいよいよ深まり、いつ降りだしてもおかしくないように思えた。バスの到着まであと十分、源一は家で大人しく待っている唯に何か買って行ってやろうと、土産物屋を物色し始めた。そして、いまでは半ば癖になつている、どこかへ行ったなら、キーホルダーをとという習性をここでも發揮して、源一はひとつのキーホルダーに目をとめた。それをレジに持っていく。「五百円ですね」とレジ打ちの女が告げた。代金を受け取り袋に詰めて源一に渡す。「ありがとうございます」と若い女はにっこりとほほ笑んで源一を送り出した。

バスの待合所に着き、再度確認のために時刻表を見る。現在十四時二十四分。記載時刻は十四時半。しばらく待っていると向こうからバスがやってきた。プシューツと空気の抜ける音がしてドアが開く。源一たちの他にも乗り込む客が五人いた。二人は、大学の友人同士だろうかと思えるような青年たちで、もう一方は三人組の主婦連だつた。青年の方は遠くからやってきたみたいで大きな荷物を持つていたが、三人組の主婦は荷物も少なく、バスに乗り込むなり煙草を吸いはじめてほかの客の迷惑になりつつあつた。

「ちよつと」

源一はその主婦たちに声をかける。

「なんなの？」主婦たちは三十代から四十代の混成といった感じだつたが、そのうちの一番若そうな女が怪訝そうな表情でこちらをきつとにらんだ。

「煙草は公共機関では禁止されているはずですよ」祖父はやんわりと告げる。

「いいじゃない、それくらい。私たち、いつもここで煙草を吸うこ

とにしているの。ほら、運転手さんも何も云わないでしょう」

その云い分はおかしいのではないか、と伊佐雄も思った。自分さえよければいいというような大人になつてはいけない、と源一はいつも云つていた。人の迷惑をしつかりと見据え、誰の心をも騒がせずに物事に当たること、それが人生の秘訣であると云つてくれた源一の言葉を神の声のように思つていたので、伊佐雄は自分でもこの主婦に何か云つてやりたい気がした。

しかし、源一が視線をきつと女の煙草に見定め、駄目なものは駄目だという厳とした態度をとつたのに臆したのか、主婦連は煙草を灰皿にこすりつけて消してしまった。さすが源祖父だと伊佐雄は感心したのだった。

バスに揺られること二十分、目的地であるJRの駅に辿り着き、源一は二人分で五百円を支払った。バスを降りると、ぼつりぼつりと雨が降りはじめ様子である。

雨脚が強くならないうちに行こう、と源一は云い、駅の券売機に向かう。

通りを歩く人は用意周到に傘を差している人は少なく、ほとんど皆、家を出るときの陽ざしの強さに騙されたのか、雨の心配をしてこなかった人ばかりのようだった。伊佐雄はしばらく通りを眺めていた。そして戻ってきた源一から切符を受け取ると時を同じくして、ざーっと盛大に路面を叩く雨音がしはじめた。

「夕立ちだな」と源一はしみじみ云う。

「ちょうど良かったのかな」伊佐雄はそう告げると、肩をすくめて源一を見た。

「これも日頃の行いってやつかね」

二人は連れ立って改札に切符を通す。二番ホームに、大垣発名古屋行きの電車が十五時二十分に来ると表示案内板に出ている。二番ホームに降りて、客がまばらなのを見計らつて、座れそうなベンチを探す。それは難なく見つかった。

「それにしても」源一はベンチに座つてしばらくした時に声をあげ

た。

「どうしたの？」伊佐雄は訊ねる。

「あの滝の威圧感は凄まじかったな」

源一の声が熱を帯びる。

「うん、なんだか、森蔵っていう言葉が似合いそうで」

「ほう、難しい言葉を知ってるな」源一は感心する。

「うん、この言葉を使うのは生涯で初めてかもしれない。前に辞書を引いていたら見つけたんだ。森蔵って言葉は、どうして森っていう言葉が使われてるんだろう、ってね」

「森と云う物に対して古来の日本人がどんな印象を持ってきたかを考えると、その答えはおのずと明らかになるんじゃないかな」

源一は諭すように述べた。

伊佐雄はゆっくりと考えをめぐらす。

森、密集、神与、恵み、静寂、威圧、深閑。

そんな言葉が連想されてくる。

森と水、滝の威圧。

自然は示す、人間の思いなど形骸に過ぎない、と。伊佐雄は不意にそんなことを思う。人の思いが地球を救うなんてスローガンを打ち立てるテレビ番組があつたのを覚えているが、しかし、自然の営みの壮大さを思えば、意思持てる人間など、ただ母体に寄生する虫以下の存在に過ぎないのではないか、と思わせられる。

「森蔵ってのは、人の思いなどはるかに超越した次元にある概念じゃないかな」

伊佐雄はなんとかさう云う意味のことを源一に告げた。

祖父はじつと前に視線を凝らし、どこを見るときもなく見つめていた。伊佐雄は源一が向かいのホームを見ているものとばかり思っていたが、実は、そうではないことが次の言葉でわかった。

「たとえば、この雨。雨だって馬鹿にはできんよ」と源一。彼は目を細めて、言葉を継いだ。「雨の強弱や多寡なんてものは、日本人が農作を始めた昔から、人の思いではまったく左右することのでき

ない厳格なものだったに違いない。識者は常人には及びもつかない方法で、いついかなる場所に雨が降るかを察知して、それを見越したうえで雨乞いなどを行ってきたのだろう。結果、雨を呼びよせる力がある神官・巫女などと祭り上げられた人物が数多くあったと思う。しかし、古今を見回しても、自然の営みを統べた人物など、歴史上には皆無であつたと云えるだろう。そこを間違つてはならんよ」祖父はきつとそう云う記述をどこかの本で学んだのだろう。

源一の話は示唆に富んでいて魅力的であつたが、それ以上に、森蔵という言葉が人知を超えたところにある概念であることをしつかりと意識させられた伊佐雄だつた。彼はホームの天井を叩く軽快な雨音に耳を澄ませた。そのとき、向いの三番ホームの脇を貨物列車が通過して行つた。雨で濡れたレールを滑る車輪の音が柔らかい。金属と金属のすれ合う音が少なくて、それも水の力なんだと意識させられる。

伊佐雄は更に勢いを増しつつある夕立ちの中を思いっきり走り抜けたい衝動に駆られた。

小学校に通つていた時期、徒歩で片道三十分の道のりは決して短いものではなかつた。そんな中、じめつとした夏の日にこんな風に雨脚の強い夕立に降られて、家までの道のりをひたすら駆け抜けた時期のあつたことを思い出す。服や靴下がびしょぬれになつて、家に着くと同時にそれらを脱ぎ散らし、タオルで身体についた水分を拭き取つていた時に、南洋のスコールにでも出くわしたようなノスタルジックな狂想に駆られたものだ。

とても清々しい、と云うのが一番の感情だつた。暑さにひいひい云いながら過ごさなければならぬいつもの夏でありながら、こういう気持ちの良い、勢いのある、夕立と云う事象に出会うことは、日々の生活にメリハリをつけるものであつたし、実際、心地よさと不快が同居しているようなもので、その二面性がまた、心躍らせるというものであつた。

やがてホームに電車が入つて来る。電車に乗り込むとそれはすぐ

に出発して速度を上げはじめ、南に向かって進んでいく。家々の密集する地区を抜け、名古屋を目指して突き進む。窓の外で雨に濡れた民家が滑っていく。どこことなく暗い蔭があり、雨の余韻にかき曇らされているようだ。

つややかとか、しめやかとか、そんなみずみずしい着想が生まれる。

伊佐雄は家の近辺も雨が降りだしているだろうか、と想像して見た。庭にある、真ん中を丸くりぬいた岩の中にぽちよんぽちよんと波紋を生みだしながら雨が吸い込まれていくさまを想像してみ、梅雨にはまだ早い雨の景色を予感として記憶の中にだぶらせていく。そのくりぬいた中に溜まる水。雨後、一週間もすれば、ぼつふらが湧くような云ってみれば、汚い水とでもいうべきものである。雨水は決してきれいなものじゃない、と亡くなった祖母が云っていたのを思い出す。

「何を考えてるんだ？」と源一が声をかけてくる。

伊佐雄は難しい顔をしていたらうかと気にしながら、祖父に笑って返す。

「お祖母のことをちよつとね」

伊佐雄がそう告げると、源一は、「そうか」と悲しげに声を漏らした。

「お祖母が云っていたことで、雨の日にもいつも思いたす話があるんだ」伊佐雄はそう云うと、その話をしてもいいか見極めるために祖父の方をじつと観た。

祖父はその話を聴きたそうでもないし、聴きたくなさそうでもなかった。

伊佐雄は少し悩んだが、やがて話すことに決めた。

「実はね、お祖母、亡くなる前に俺にこんなことを云ったんだ」

祖母は病で亡くなったのだった。亡くなる直前、もう意識も朦朧とした中で、脇についていた伊佐雄にこんなことを告げたのだ。「伊佐ちゃん、お祖母はもう長くないわ。でね、雨水を持って来てく

れないかしら。今度、雨が降ったらでいいから」それが事実上、伊佐雄が聴いた中で祖母の最期の言葉だった。それからしばらくして祖母は意識が途切れ、到頭雨は降ることなく、祖母の寿命のほうに先に尽きてしまったのだ。そしてなんとという皮肉か、祖母の葬儀が執り行われていた最中に、遅ればせの雨が降り出したのであった。

伊佐雄はそれまで、祖父にその話をしたことがなかった。なにか悲しみの極みのようなものがある気がして、うまく言葉に表して、その無念さ、やるせなさを伝えられる自信がなかったのである。しかし、こうして話す機会が持てたということは、伊佐雄にとって、ひとつの大きな前進であると思えるのだった。

「そうか。お祖母がな」と源一は声を低めた。

そうするうち、電車は名古屋駅に到着した。

雨は霽り、晴れ間がさしはじめていた。

金色の光波がちらちらするまばゆい晴天である。

伊佐雄は電車を降りるとき、その光に目を射られて、一瞬、何もかもが見えなくなった。ホームの屋根から落ちてくる水滴が首筋にぴちゅんと落ちて、ぞくぞくつと震えが来た。源一はその様子を見て笑っているようだったが、伊佐雄はまだその様子を確かめることができない。やがて目が慣れてくると、笑った祖父に怨みがましい視線を投げながらその後をついていった。ホームをかえて、熱海方面行きの電車に乗り換える。

家のある静岡まではもう少しかかる道のりであった。

一（後書き）

感想・意見等、お待ちしております。
よろしく願いいたします。

夜眠る時、伊佐雄の頭をよぎる着想があつた。頻繁にと云うほどではないけれど、それでも月に二、三度はそう云う事が起こり得る。熟睡することの少ない伊佐雄の眠りは、不確かなものの集合体と云う趣きが強く、いったいどうしてこんな夢ばかり見るのか、まったくもって意味がわからないのであつたが。

それは大きな水瓶のようなもので、伊佐雄はその中に浮んでいる島だつた。あまりにも大きく、縁がどこにあるのかわからないような状況だつたが、その水の中に浮んでいる自分が徐々に溶けていき、最後には思念だけが残留して、肉体は完全に存在を消しさと云う夢であつた。神経が衰弱しているんだらうかと思ふこともあつたが、それはそんなつまらないことを超越した上で存在している、ひとつの思いの結晶である気がした。

「伊佐雄、伊佐雄」

そのとき、階下から母の声が掛かつた。

伊佐雄はもう六時半という時刻になつていることを枕元の時計で知つた。

「はい」と声を上げる。

階下へ行くと、そこにはもう妹の唯が起きていて、朝の化粧を始めていた。睫毛を少しでも長く見せるために、マスカラを塗つているところである。伊佐雄は気まずい思いをしていたが、それには何も云わなかつた。OLである唯にとっては、朝の化粧が一番大切なことであるに違いなかつたから。

そんなことを思っていると、「お兄ちゃん」と妹の方から話し掛けてくる。

「どうした？」と伊佐雄は訊ねる。

「お兄ちゃん、冬山は好き？」

その言葉にはなにか探るような印象があつたので、伊佐雄は、こ

れは穏やかではないな、との思いを強めた。

「嫌いではないけど、好きでもないね。ウィンタースポーツとか、あんまり興味ないし」

「そっかー」と力なく云う唯。

「いったい、どうしたんだい？」と伊佐雄は妹に訊ねる。

「実は、いい人いないかな、ってぼやいている子がいて、その子、なかなか見た目も可愛くて上品な子なんだ。お兄ちゃんに紹介したらどうかと思ったんだけど、でも、そう云うことならやめておいた方がいいわね」

唯はそう云って苦笑した。

「はは、冬山は似合わないよ」伊佐雄は苦笑する。

「そうよね」唯は同意するように苦笑いした。

会話はそれきりだった。

二人の会話を聞くともなく聞いていたのが祖父の源一だったが、伊佐雄も唯も、そんなことには頓着しなかった。祖父はいまでは耳が遠くなっていて、意思を伝達するには、大きな声ではっきりした滑舌をもって喋らないといけないのだ。だから、二人の会話が祖父に聞かれて、どうこうという心配はない。しかし、源一はその顔を歪めて、まるで汚いものを見るように、二人の孫の顔を順繰りに見ている。

「もしかして、お祖父に聞こえてる？」と唯は心配した。

伊佐雄は「大丈夫だろう」と云ったが、自信は無かった。

「だって、ほら、きつい顔でこっち見てるよ」

「大丈夫だって」伊佐雄は苦笑する。「だいたい聞こえてたってどうすることもできないだろう。お祖父ももう年なんだから……」

祖父の年齢は八十を超えていた。

伊佐雄は二十五歳だったし、父は還暦を迎えようとしている。祖父の年齢にはうなずけるものがある。しかし、伊佐雄はそのときふと、あの子供のころの、梅雨前の夏の日、倚天の滝へ行ったときのことを思い出した。

あの頃はお祖父も壮健だったな、と伊佐雄は思い返す。

そしてあまりの懐かしさに、ノスタルジックな想念を掻きたてられて、しばらく摩耗した思い出の中に意識を涵していた。

あの年はたしか、耐えがたいほどの暑さを持った夏だったな、と伊佐雄は振り返る。そして、あの岐阜まで行つて観た、力強い自然の造形物である滝の威容を思い返して、その夏の間中励まされていたな、とそこへ連れて行つてくれた祖父に多大なる感謝を覚えていた。そういえば、あの滝の縁で水鳥が飛び交うのも見たんだっかな。カワセミだろうと思われるつがいの小さな鳥が、まるで蜉蝣のように尾を水面すれすれに滑らせながら飛び交っていたんだった。ふだん街中での生活であるため、そういう自然の最たるものを目の当たりにすること自体珍しかった。だから、あの宝石のような色合いの小鳥達を家に持ち帰つて育てられたらいいのに、と憧れを込めて思い描いていたものだった。

カワセミとまではいかないけれど、セキセイインコを飼つても良いという許可を得たのはそのころだった。しかし、その鳥は、冬を越すことなく死んでしまった。原因は開いていた部屋の窓から入ったノラ猫だった。何故分かったかと云うとそのインコを置いていた部屋に人が入つてくるまで、ふてぶてしくも猫はそこで眠っていたからだつた。人の気配を察知した猫はひよいと窓から出て行ったのだが、その後ろ姿を母が見つけたらしい。インコは無惨な殺され方をしていたため伊佐雄たちに見せられることはなかった。『どうしてインコがないの？』と訊ねる伊佐雄と唯に説明するのが困難だったと、後に母は述懐した。

庭に埋められたインコの死骸を思うとき、なぜか伊佐雄はいつもそれを水と絡めて思い返す。地面で植物の養分となるインコの死骸は、徐々に腐敗していくが、それは天から降つて来る雨水を吸収しながら進行していくもので、なにか、雨自体が強酸とか強アルカリの液体でもあるかのような印象で、物を溶かしていく触媒でもあるような気さえするのである。じゅくじゅくになつた肉体はもう

元の形をとどめておらず、やがて、土くれと同じ存在になるに違いない。そして幾分かの体中の水分は地中に吸い込まれた雨水と一緒に、土の層で濾過されながら地下水に合流して、海へと流れていくのだらう。そしてそこで蒸発して、天に昇り、雲となって、また雨として循環していく。そのサイクルの中に組み込まれることが生の運命である気がする。

それ以来、ペットと云って特別に飼ったものはなかった。一度、近所で生まれすぎて困っている猫を引きとって育てたことがあったが、一年もしたころだらうか、ふとしたことで姿が見えなくなり、それきりだった。どこか他にいいところを探し当てたか、それともどこその道で交通事故に遭ってしまったか、そんなところだらうと結論し、それ以上、話題が家族の口の上されることはなかった。

そのことに結んで、印象に残っているのがその猫の使っていた水飲み用の器だった。

そこには猫がいた当時、水道水やら牛乳やら、猫が好んで飲みそうなものを入れて、出してやっていた。しかし、いなくなって数日が過ぎ、器には水が入っていたのだったが、そして恐らくそれは水道水であったと思われるのだが、日が経つごとに水が黒ずんできて、しまいには表面に微細な白とか青とか緑のカビが繁殖するようになったのである。水道水がもとでそんなふうになるとは思ってもみなかったから、その頃から、伊佐雄は水道水は綺麗じゃないんじゃないか、という印象を抱くようになっていた。もちろん、今から思えばそれは様々な要因が重なって起こった変化だったのだらうが、伊佐雄はそれが水道水の不透明性・不衛生性を示している気がして、そこに不信感を抱くようになっていた。祖母が雨水が欲しいと云って亡くなっていった事と合わせて、何か、水道水よりも、雨水のほうがきれいと言え思えるような印象を遅しくしていったのだった。

もちろん、今では忌憚なく水道水を飲むことはできる。しかし、高校当時、体育の授業の後で乾いた喉を潤すために蛇口に口を近づ

けてごくごく水道水を飲む同級生の姿を見ながら、そんな真似だけは絶対にしないでおこうと固く決意していたほどのアンチ水道水派だったのである。もちろん、整水機の水も同様であった。

「ねえ、お兄ちゃん」

気がつくのと、唯が怪訝そうに眉根を寄せて伊佐雄を見ていた。

「うん？」彼は応答する。

「なんか難しい顔してたよ」唯は訊ねた。

「いろいろあるんだ」伊佐雄は多くを語らなかった。

「そう」唯は声を低める。

伊佐雄は妹にそう返答してからも、自分の心にわだかまる気持ちを整理するのに苦心していた。コップ一杯の水、それが自分の中にある隔たった意思を思わせるようで、なんともやるせなくなっていく。水を咽喉に詰まらせて亡くなってしまふ人物が、過去にあったかのような印象を抱いてしまふ。その頃　　といつて高校二年のころだが　　祖母が亡くなった。生来、身体の線が細くて、それほど健康体でなかった祖母は、いつからか病を得て寝込むようになり、今でいう所の合併症に罹って命を落とした。亡くなる間際、伊佐雄は祖母に云われたのである。『伊佐ちゃん、お祖母ちゃんはもう長くないわ。でね、雨水を持って来てくれないかしら。今度、雨が降ったらでいいから』その言葉は何か献身的なことをしたいと思っている伊佐雄にとって一つの指標となるような言葉であった。しかし、自分は何もすることができない。祖父が昔、話してくれた、古の百姓の立場そのものだったと今思い返して、無念さのみが心にこみあげてくる。つまり、雨が降るまでひたすら耐えるしかないという忍従の日々である。結局、祖母が存命の間に雨は降らず、彼女の願いは叶うことはなかったのであったが、ときどき、仏前に雨水を供えることを家族に承認してもらっていた。それは大学に進学するまで続き、大学に行くために家を離れてからはその役目は伊佐雄の母である伊月の仕事となった。

祖母が雨水にどんな思慕を抱いていたのか、それは分からない。

そもそも祖母はそれほど伊佐雄にとつていいお祖母さんというわけでもなかったし、源一ほどに自分を可愛がってくれていたという印象も希薄だったのだ。『伊佐雄、貴方はきつと好人物になるでしょうね』そう告げられたのはいつのことだったか。祖母の心には純粹無垢な塊があつて、それが子供の純真に似たものを感じさせ、そもそもの子供である伊佐雄や唯の気持ちと競いあつてしまい、両者の間にしつかりとした関係を結ぶことを阻害していたのだろう。伊佐ちゃん、伊佐ちゃんと呼ぶ祖母の声だけはいまも頭の中に残っている。そんなことを考えているうちに、唯は化粧を終え、手鏡やマスカラなどをしまつて、朝食を食べる準備に取り掛かる。

朝食はいつもと変わらないとはいえ、なかなか豪華なものだった。鮭の塩焼きに、ほうれん草に、きんぴらごぼうに、自家製のナメタケ、納豆という健康的なメニューである。伊佐雄はごはんをおかわりして、さらに食べた。唯はゆっくりと咀嚼して、少なめのご飯で一食を終わらせるつもりのものである。

唯のプロポーシヨンの管理は見事と云う一言で表せるほど、なかなか整つたものであつた。それは毎日の食事から、日々の生活におけるストレスの有無などにも亘つていて、伊佐雄にとってはそれはひとつの完成であるような気がしたのであつたが、変化は常に流動するものだから、という唯の意見を受けて、それもそうだ、とする気持ちから全面的にその意見を受け入れる気持ちが大きかつた。

「そんなんで足りるのか？」と伊佐雄は訊ねる。
「足りる足りないじゃなく、ここらへんでやめておくべきかな？
つてところでやめておくのが抑制というものよ」

唯は尤もらしいことを述べる。

「あーあー、そうですか」と伊佐雄はまともに取り合わない。
「お兄ちゃんみたいに考えなしにいるんなものを食べてたら、そのうち後悔することになるからね」唯は減らず口を叩く。

「ふん、どうせ、しょうもない人間さ」と伊佐雄は自嘲気味に云う。
「そこまでは云つてないわ」

唯は苦笑する。

「しかし」と伊佐雄はあることを口にしかけた。

「何？」と唯は訊ねてくる。

「お祖母ちゃんのことなんだけど」伊佐雄は告げる。

「うん、何？」と唯。

「実は、お祖母ちゃんがなくなる時、雨水が欲しいって云われたんだ。それって、いったいどういう意味があったんだらうっていう思いがずつとしていてね」

「雨水……」唯が語尾を伸ばすように伊佐雄の発言を受ける。

「わかるか？」伊佐雄は訊ねる。

唯は困惑した表情を見せて肩をすくめた。「わかんない」

「それは、祖母さんがいつも思っていたことに関係しているんだよ」不意に後ろからしゃがれた声がかかった。

「お、お祖父」伊佐雄は驚いた。

祖父の方から話しかけてくることなど、最近ではなかなかなかったことである。いったいどういう風の吹きまわしかと思ったが、それには祖母のことがからんでいるのだと類推できたため、多くを問おうとしなかった。「いったい、どういうことなの？」と伊佐雄は解法を求める迷妄者のように大きな声で訊ねる。

「それはな」と祖父源一は言葉を引き延ばした。「お祖母は、雨水と云う奴に多大なる期待をかけていたんだよ」

その言葉を聞いて、伊佐雄はある予感が脳裏に閃いた。その先の祖父の言葉を聞かなくても、わかっているような、既視感がまわりを取り巻いていた。

「なんか分かる気がする」伊佐雄はつぶやくように言葉を繰り返していた。

「分かる？ 分かるか？」源一は驚いたように声を上げた。

「大気を取り巻く大循環とかそう云う物に対する憧れなんじゃない？」

その言葉を聞いた源一は意味ありげに目を細めた。

「なんだ、知ってたのか」と源一は云う。祖父は目を細め、眉をぴくぴく動かしている。それだけ取り上げれば、まるでテレビアニメの一部分であるかのようにコミカルであった。「雨に雪、川に滝。思えば、水にとらわれた一生だった」源一はしみじみとそう云った。伊佐雄はむくむくと疑問がわいてきて、そのことについて、源一に話してもらおうと試みた。「いったいどういうこと？ 水にとらわれた一生だったって？」

「それにはなかなか長い話が必要になって来る。この出勤前の時間にすべてを話す事は無理だと思うよ。なんなら、今日、おまえらが帰って来てから話してやるから、それまで待つてくれんかね」

否やはなかったため、祖父の云う通りにした。

いったいどんな話が聞けるんだろう？ 伊佐雄は心の裡に期待する気持ちを宿していた。

「ただひとつ云えることがある」源一は云った。

「なに？」伊佐雄と唯はほぼ同時に問い返した。

「お祖母は、本当に雨水を欲しがっていたんだよ」

源一の言葉はそれまで伊佐雄が考えていたほど祖母の死が安楽的なものではなく、むしろ欲しいものが手に入らず煩悶を繰り返す、飢餓的なものであったことを意識させられて、なんともいえない陰鬱な気分に苛まれた。これまであまり考えようとしていなかったが、確かに雨水が欲しいと云った祖母の顔は窮屈に歪み、もうそれ以上思い出したくないというような苦痛の表情だったのである。そのことを掘り返されて伊佐雄は憂鬱になる。

「お祖母は満足しきれずになくなっていったんだ」と源一は語気を強める。

伊佐雄に言葉はなかった。

その雰囲気を感じて、唯が助け船を出そうと試みる。しかし、的確な言葉が出てこず、何の役にも立たない。

「儂はな」と源一は声を高めた。

伊佐雄は祖父が何を云おうとしているのか、見極めようとじっと

その言葉の紡がれるのを待った。

「お祖母の姿はまったく、あの、雨を恋い焦がれる、早魃に遭っている昔の百姓の姿とダブってしまうんだよ。僕はお祖母に、死の床での希求について何もしてやれなかった。あるとき、雨が降らないで、水道の水を日に当てるに慣らした物を雨水だと云って渡したことがあつてな。でもあいつはにおいを嗅いだだけで、それが雨水でないことを察知しおった。考えてみれば、厄介な患者だったんだな。それ以来、僕は雨が降ることを天に祈っておったんだが、結局、その願いは届かなんだ。どうすることもできず、失意にくれながら、あの葬儀の日の雨を恨めしく思ったよ。あと数日、早ければ、お祖母の願いを叶えてやれたのに、ってな。もう虚しくて悔しくて仕方なかった。あのときほど、自分の無力さを思い知ったことはなかったな」

源一はしみじみと昔のことを思い出す風に言葉を押し出した。

「さて、続きは帰って来てからだ。早くご飯を食べてしまうことだ」
そう云うと、源一はまた新聞を読み、テレビの脇のテーブルへ向かった。

伊佐雄は祖父の言葉を受け入れていた。いったい祖母にどんな事情があつたのか？ それを知りたくて、今日の仕事は早めに切り上げて帰ってこようという気持ちに傾いていた。それはまた唯も同じ気持ちだったらしく、二人で顔を見合せて、そんな思いが胸中にあることをまったく話していなくとも、互いに何を考えているかわかるような具合だったのである。

「お祖母のこと、ちょっと気になるな」と伊佐雄が云うと、

「うん、今日は仕事でもそのことを考えちゃいそうよ」と唯が告げる。

「うん、うん」伊佐雄は同意する。

でも、水に関して因縁が深いということなんだろうか？ と、伊佐雄はふと、昔聴いた慈正寺の和尚さんの法話のことを思い出していた。生前の苦しみは、すべて前世からの悪業の報いである、とい

う話。それはいったいどういうことなのか？ もともと人には善にも悪にも傾く趣きがあつて、その心の持ち方によつて、それに対応するさまざまな事象が立ち現れてくる。善を為す者には幸せを、悪を為す者には障害を。それを仏教では因縁というのだと、慈正寺の和尚さんは告げたものだ。

それは宗教の枠を超えて、一般常識として受け入れられているような概念であつたけれど、寺の和尚さんに改めて云われると、そうでなくてはいけない、むしろそうにちがいない、と思うような一種の強迫観念に駆られるのだった。

「なあ、唯」伊佐雄は当時のことを思い出しながら、妹に訊ね掛けた。

「なに？」と唯。

「唯は慈正寺の和尚さんのこと、どう思う？」

「突然、どうしたの？」と唯は怪訝そうに眉をひそめる。「強いて云うなら、偉い人かなあ」

「偉い」

「うん」唯は言葉を継いだ。「実際、若い頃から修行を重ねて来られて、あの力強い読経の声は一朝一夕にして成るものではないと思ふ訳よ。それにはさまざまな人生の機微に通じ、経験し、ひとつの権威にまでなられた方だと思ふのよね」

「そうだなあ」伊佐雄は妹の言葉に同意する。

「そんな慈正寺の和尚さんの云うことなら、白を黒と云われても、そう信じざるを得ない気さえしてくるのよね」

「なかなか入れ込んでるな」

「そうかもしれない。でも、本当に、あの人はこの辺りでは一番の人士だと思つわ」

唯はそういうと、綺麗な形の瞳をきらめかせて言葉を結んだ。

伊佐雄は改めて妹の容姿を眺める。

美しい髪はうっすら茶色に染めてあるが、それが嫌味でもなく、ちよつと白っぽい皮膚の色にうまく調和している。肌はきめがこま

かく、それは化粧の効果であるかもしれないが、毛穴が黒ずんでいくこともないし、肌荒れの心配もなさそうだった。眉はしっかりとした線を描き、目はぱっちり二重の、猫のそのような輝きを見せられている。鼻は多少低いけれど、それが彼女の顔自体を愛嬌あるように見せているし、唇はやわらかそうで、魅力たっぷりな淡い系統の口紅をさしている。

そんな唯がいま彼氏の一人もいないのには驚かされる。高校時代には付き合っていた男がいたようだったが、それ以来、数年、OLをしている間、まったく彼氏の存在がないのである。不思議な話だった。

いま祖父は咽喉から管を通して、栄養分を直接体内に取り入れていた。

医師からは、老衰で自分で咀嚼することも出来なくなっているからと云う説明を受けたが、枕元で祖父が身振り手振り、そしてうーうーという内に籠ったような声で告げることがを総和してみると、祖父もまた祖母と同じように雨水がほしいと云いつづけていることが分かった。

雨水。雨水にいったいどんな思い入れがあるというのか？

祖母と云い、祖父と云い、いったい何が彼等の気持ちを雨水に向かわせるのだろうか？

祖母と違つて祖父の場合は恵まれていた。

祖父が雨水を欲しがっていると分かつてから、それほど時を待たずに雨が降った。まだしっかりと意識を保っていた祖父に、盥を出して集めた雨水をコップに入れ、病床に持って行った。祖父はそれを咽喉にささった管のおかげで飲むことは出来なかったが、いきなり手にその水を受けると、貴重なものを得たという雰囲気を感じて、顔や首や腕にそれを含ませていったのだった。雨水はごく少量だった。しかし、祖父の身体を湿らせるだけの量はあった。祖父はまるでそれが死にのぞむために必要な儀式であったかのように、そのよくなことを行つた直後、発作を起こして、それ以来寝込んでいた。

「お祖父ちゃんは幸せだったのかしら」母の伊月が声を出した。

枕元にいた伊佐雄は返事をする。「きっと幸せだったんだろうよ」その言葉に、源一はいまではだいが弱まってしまった息を一度、強く繰り返すと、目をぴくぴくと動かして反応した。

「お祖父も聞いているのかな？」伊佐雄は力なくほほ笑む。

「もう立ち上がることもできないかもしれないわね」伊月はそう云うと、悲しげに視線を伏せた。「最近思うのよ」

「何を？」伊佐雄は訊ねる。

「お祖母ちゃんもお祖父ちゃんも病床で水を欲しがったでしょう。これってどう云う意味があったのかなって」

「意味か」伊佐雄は言葉を繰り返した。

「難しいでしょう？ 私もずっと考えてるんだけど、一つ、思いだした話があるのよ」

「うん」と伊佐雄は返事をする。

「病床で水が飲めなくなってから欲しがった雨水って、実は、事故とかで失った手や足の痒みを覚える患者のその痒みみたいなものじゃないか、ということなの」

「うん」と伊佐雄はまた云った。

「いったい、どう云うことが頭の中で行われていたかは知らないけど、確かにお祖母ちゃんやお祖父ちゃんは自分にはどうすることもできないものを望んでいたでしょう。お祖母ちゃんは時期的に間に合わなかった。お祖父ちゃんは身体がもう水を飲めない。二人ともあんなに恋い焦がれていたものを受容出来なかったわけなのよね」

「そうだね」伊佐雄は返事をする。

「お祖父ちゃんはまだ持つかもしれない。でも、水を欲しがってももう自分ではどうすることもできないと分かっているのか、あれから水を欲しいって云わないでしょう。これって、もう自分のことを諦めてるんだと思うの」

「諦めてる、か」

「私たち、お祖父ちゃんに何をしてあげられるかしら」

「そういえば」と伊佐雄は思い出したように言葉を口にした。「あのさ、お祖父、雨水のことを話してくれたことがあったんだ」

「うん？」と伊月は怪訝そうに返事をする。

「うん、雨水のことだね、お祖母のことに対して、お祖父が云った印象的な話があるんだ」

「気になるね」と伊月は云う。

そのとき、室内に唯が入ってきた。ずっと部屋に籠っていた二人

に冷茶を淹れて来てくれたのだ。

「ほら、落ち込んでちゃいけないわ。これでも飲んで元気出して」
伊佐雄は窓から見える光景に目をやる。

「唯、お前も聞いてくと良い」伊佐雄はそう云うと、二人に話しはじめた。

それは退屈と云えば退屈な話だった。

源一が話してくれた、自分が雨をどれほど希求していたか、という話だった。源一はこう云った。「雨が降らないと祖母さんが浮かばれん。ぜひ、降ってくれないか。降ったなら、わしはもう生きることをやめてもいい。祖母さんの希望をかなえてやってほしい。たのむ、天よ、神よ、龍神よ」

龍神という名前が出てくる時点で、祖父の大きさがわかるもんだけど、と伊佐雄は苦笑した。そう話してみると、祖父はまるで自分の話をされているのを、昏倒する意識のなかではつきりと意識しているのか、やんわりとほほ笑んでいた。

「ああ、お祖父が笑ってるわ」唯が反応する。

伊月も「そうね、笑ってる」と嬉しそうに声を上げる。

伊佐雄はそれ以上、祖父の話をするのをやめてしまった。その話には続きがあつたが、いまはそれを話す時ではない気がしたのだ。「ここにいたか」そのとき声がかかった。

父だった。父の雄大は厳格な人だったが、そのときの表情には穏和なものが見えていた。雄大の実父である源一はいま、病床で弱って眠っている。心中にはいろいろと穏やかでない物も見えているのだろう。

「何を話してたんだ？」と父は訊ねてくる。

「ちよつと水のことをね」と伊月が答える。

「水、水か」父は怪訝そうに言葉を繰り返した。

「お義母さんのときも雨水で、今回のお義父さんも雨水。いったいどういふことなんでしょうね」伊月は心配そうにそう云った。

「なにか死にゆく者の心の中に、水、特に、雨水ってやつが重要な

働きをしているのかな」

「それかもしれないですね」と伊月は声を上げる。

「それ？」雄大は繰り返す。

「ええ、自分がこれからそちらの世界へ向かうことになるのだという覚悟を決めるための儀式みたいなものかしら。私はそうだと信じたいわ」

「儀式？」

「ええ、決意表明みたいなものよ。お義母さんは結局、水を触ることとはかなわなかったけれど、仏前で雨を見ることができて幸せだったと思うのよね。確かに、亡くなられた時点で、雨を仰ぐことはできなかつたけど、きつと火葬されたときに出た煙やらなんやらが天に上って、雨を降らせる雨雲と混じって、お義母さんの魂は無事、天のものとなったと思うのよ。そう云う風に考えたことない？」

雄大は首を振った。「わからないな」

「そういうのは想像力のなせる思いなのかしら」

「つまり、俺には想像力が不足しているということか？」

「そこまでは言ってないわ」伊月が云う。

「まあまあ」と唯。

伊佐雄も何か云った方がいいかと思いつつ、ずるずると時間だけが伸びていった。

家族五人がひとつの部屋に集まっていた。

「さて、夕食の準備を始めるから行きましょう」と伊月が云う。

伊佐雄と唯は顔を見合わせ、そして部屋を出た。後から父母もついてくる。

源一は息を荒げることすら突然うめくこともなく、じっとベッドに睡っていた。

当分は大丈夫でしょう、と告げ、伊月は部屋を豆電球にして出ていった。

「ねえ、お母さん」と唯が訊ねる。

「どうしたの？」と伊月。

「お祖父、もう長くないのかしら？」

唯の言葉には悲しみよりも、決定事項を指でなぞるような慎重さの、何か、問い質すような色合いが見えていた。

「わからないわ、いったいどうなるのか」伊月は淋しそうに目を細めて云った。

「知っている人が死の淵に立ってるって云うのは、お祖母のときにも味わったけど、辛いものだわ」

「まあ、何年も生きていれば、いずれは経験しなければならぬことなんだから」

「でも」と唯はむきになつて云う。

「さあ、あつたかいお茶でも出したげるから、ゆっくりしてなさい」その言葉に導かれるように、唯は頭を下げてから居間に戻った。

茶葉を入れた急須に湯を注ぎ、湯呑と一緒に伊月が持つてくる。

ダイニングテーブルに座っている伊佐雄と唯に茶を入れ、雄大にはコップと瓶ビールを出す。

「気がきくな」と雄大は飲んでもないのに上機嫌になる。

「父さん、ビールってそんなに美味しいの？」と唯が怪訝そうに尋ねる。

伊佐雄はそんなやり取りを目にしながら、すっかり暮れてしまった窓の外を眺めて、やがて思いついたように窓辺へ行く。扉を挟んだ向こう側に街灯のついているのが見えた。街灯は青白い光を放っていて、その周りに秋の虫がぶんぶん飛び交っているのが見えた。大きいのはコウモリだろうか？ コウモリがこの近辺を飛ぶことはまれだったが、しかし、まったくくないという訳ではない。吸血コウモリはさすがにいないけど、そんなのがいてもいいんじゃないかと彼は常々思っていた。彼はカーテンを閉めた。

「すまん」と父の雄大に云われる。

伊佐雄は「うん」と返事をして、そのまま席に戻った。「で、お祖父のことだけど」と伊佐雄は続ける。

「祖父さんがどうした？」と雄大。

「うん、お祖父、あの最近の、水を欲しがってるのってどういう意味があるのかな？ わかる？」

「んー」雄大はしばらく考えるようにつぶやいた。「祖父さんは昔から、水を欲しがるようなタイプでもなかったからな。いつたい、心境にどんな変化があったんだか。昔に何かあったのかな？」

そんな風に云う父に、伊佐雄は何か心の奥底で引っかかることがあるのに気づいた。それを精密に思いだそうと試みる。やがて、そのことに思い当る。

「そうだ、お祖父、あんなことを云ってたんだった」

「あんなこと？」と雄大と唯が顔を見合せてから、伊佐雄の方を見た。

「うん、お祖父、お祖母が亡くなってからしばらくしてこんなことを云ってなんだ」

伊佐雄はしつかりとした語調でその先を続けた。

「お祖父、ただひとこと無念だつて云つてた。そして、お祖母に水をあげられなかったことをひどく悔やんでた。ただどうすればいいかわからなかった、と云うだけで、あの、俺が、水道水を天井にあてて、雨水だつて偽つたことにしたつて、その本心は、お祖母をいたわる気持ちから出たものだったけど、結局、裏目に出てしまつて、お祖母をぬか喜びさせるだけにとどまってしまった。お祖父はずっと悔やんでたんだろうね。そして、いつか、自分が同じ立場に立った時に、お祖母が出来なかったことを自分でもやってやろうと思つて、雨水を所望していたんだと思つ。きっとそうだよ。すべてはお祖母につながっていたんだよ。俺はそう思う」

「なるほどな」と雄大は納得したように言った。「祖父さんの祖母さんを思う心は折り紙つきだからな。近所の人も、うちの祖父さんと祖母さんはおしどり夫婦だつて云つてたよ」

「へえ」と伊佐雄は感心するように声を漏らした。「とりあえず、あの身体に雨水を塗つたのは、水分を蒸発させて空気と一緒にして天界へ送ろうというお祖父ならではの葬送の儀式だったんじゃない

かな」

伊佐雄はそう云って肩をすくめる。

「そう云うことをしてお祖母さんを弔うとでもいうのかな」雄大が云う。

「俺がそう云う気持ちでやってたことは斜視的に見ていたくせに、いざ自分がそうなると、それまでの自分の意識を裏切るようなことを平気でするんだな」

「まあ、そう病人を責めてやるな」

「そうなんだろうけど、やっぱり一言云いたくなっちゃうよ」

雄大は落ち着いて息子である伊佐雄の顔を見た。「水か。また難儀なものに執着することになっちまったな」雄大は唇をつきだすようにしてぶつきらばうな表情を見せている。そこには祖父に対する思いやりの心は無いように見受けられた。

「お祖父はもう助からないのかな」伊佐雄が緊迫した調子でそう告げると、唯が、

「そんなことない、きっと大丈夫だよ」と励ます風に伊佐雄に告げて来た。

「唯」と伊佐雄は妹の名を呼ぶ。

「だって、このままお別れって私、いやだよ。お祖父にはもつと長く、少しでも長く生きていてもらいたい。それが私の願いだよ。お兄ちゃん、お父さんも一緒に気持でしょ？ 雨水がほしいならいくらでもあげるから、お祖父ちゃんには少しでも長く生きていてほしい。そう願うことは間違ってる？」

「間違っているってわけじゃないと思うけど、でも、歳のいったものから順に亡くなっていくっていうのは自然の摂理だと思うし、お祖父ももう、十分、生きたんじゃないかな？」伊佐雄は自分の思いをしつかりとぶつけた。

しかし、唯はその考えに納得がいかない様子である。

「いまここに家族が諦めてどうするのよ？ そんなこと思ってるって知ったら、お祖父がかわいそうだよ。お祖父も可能性がある

なら、もつと生きたいはずだよ。私たちと一緒に笑い合つて、楽しく時間を過ごして、毎日をゆつたりと過ごしたいはずだよ。でも、お兄ちゃんたちがそんなこと思つてゐるつてわかつたら、いくら生きたいと願つても、その気持ちがあくじけちゃうんじゃないかな？ 私、変なこと云つてる？」

唯は真剣にそれらのことを述べた。

伊佐雄は唯の云い分もわかる気がした。そして唯が子供の頃から、理想的なもの、美しいもの、綺麗なものに惹かれるたちであつたことを思い出していた。唯のなかでは、死の床についている者でも、理想的でなければならぬ、美しくなければならぬ、綺麗でなければならぬ、と思つてゐる節が見え隠れしていた。

「いつたい唯はどうしてそんな風に源一を長生きさせたいのだろう？ そのことに対して、伊佐雄はひとつの解法を持つていた。

生きられる望みがあるなら、間違つてもそれを破棄する方向へ進んじゃ行けない。それが唯の持論だつた。それは、祖母が亡くなつたときに唯が云つた言葉であり、また、とても印象に残つていて、数年たつた今でもその時の唯の真摯な眼差しを忘れることができない伊佐雄だつた。

伊佐ちゃん、伊佐ちゃん、と云つてくれた祖母が亡くなる直前、伊佐雄は祖母の生還を諦めていた。もう死んで行くしかない人なんだ、そして、生きていてももう自分には何の得にもならないだろうという功利的な思いも時々であるが抱いていたのも事実だつた。祖母からすれば、不孝な孫と云うことになるかもしれない。しかし、祖母の水を欲しがる姿を見てしまつては、醜態を晒す前に楽になつてくれたほうがいいと思うことも、あるいは正義であつたかもしれないと自分に云い聞かせたのだ。祖母はもう助からない。むしろ、助かつてはいけないとするような思いを持つこと。それは大罪なのかもしれない。そして、そう考えていたことを祖父が同じ状態になるまで、すっかり忘れ去つていたのだが、伊佐雄はまたそのことを思い出した。唯が自分とはまったく正反対の立場で、身近な人物の

死に直面していることに驚きを隠せなかった。

自分があまりに不孝なのに対して、妹のなんと献身的で温かい心の籠めようだろう、と。

「ねえ、お兄ちゃん」唯が綺麗な瞳で伊佐雄を見る。

「うん？」伊佐雄は返事をするが、それまで思考に沈溺していたため、なかなか意識がはつきりしない。

「お兄ちゃんは、お祖父ちゃんがなくなるかもしれないこと、どう思ってるの？」

答えにくいことをずばつと聞いてくる妹だな、と感心させられる。

「どうって、何が？」と伊佐雄。

「だから、出来れば亡くなってほしくないとか、こんなこといったらお祖父ちゃんに悪いけど、早く亡くなってくれた方がすっきりするとか、そういうようなことよ」

「ああ」

「なんか煮え切らないわね」唯は肩をすくめて云う。「私は絶対、亡くなってほしくないわ。せつかく縁あってこの世に生を享けたんだもの。限界まで行きぬくという姿勢で、出来る限りのことはやってほしいって思ってるの。お祖父ちゃんもまた体調を盛り返すかもしれないじゃない」

「？かもしれない？なんだろう？ そんなこと考えていては、この世界は立ちいかなくなってしまうよ。というか、世の中の趨勢に取り残されてしまう気がする」

「取り残される？」と唯は訊ね返す。「いったい、それはどういうこと？」

「だから、一人の死にかかずらつてしていると周りが見えなくなって、気がついたら、自分だけ外に追いやられているかもしれないってことだよ」

唯は目を細めて、ふーんと云った。「お兄ちゃんはそう云う言い訳をするんだね」唯はきつめの言葉を吐く。

「言い訳じゃない。本当のことを云ってるだけさ」

「本当のこと？」と唯。

「実際、本当にそんなことで取り残されるとか云うのって、間違ってるって云いたいんだろう？ でも、俺だって、お祖父にはよくしてもらったよ。ほんと良くしてもらった。いろんなものを買ってもらったし、いろんなところに連れて行ってもらったし、行事ごとに毎回気安く返事をして請け合ってくれたし、そう云う面では感謝してるんだ。そのお祖父が死にそうになっていて、何も思わないわけがないじゃないか。俺だって、本当はもっと長生きしてほしいって思ってるよ。でも、そう思ったって、無駄だろうって気持ちが生じるのは仕方ないさ。お祖母もあんな風に亡くなっただしさ」

伊佐雄がそこまで云うと、唯は気持ちを抑え込むようにして言葉を紡いだ。

「お兄ちゃん死が怖いだけなのよ」

伊佐雄は自分が責められる意味がわからなかった。それで思わず訊ねる。「怖い？ いったい、何を怖がってるって云うんだよ？」

「死と云うものが持つ永遠の停止状態を怖がってるんだわ」唯はむきになる。

「停止状態？ なんだよそれ？」

「覚えてないの？ 忘れてるの？ お兄ちゃんは一度、死にかかったことがあったでしょ？ 中学の受験のときに」

伊佐雄は目をぱちぱちとさせた。いったい何を云われているのかわからなかったのだ。しかし、思いだす。そうだ。確かに俺は一度死にかけて。普段は忘れてるけど、夜眠るときなんか、ふとその時のことを思い出したりする。伊佐雄はできれば、その時のことを思い出したくはなかった。なぜ、唯がこんな折にその話を持ち出したのか分からなかった。彼が死にかけてたときは、この家ではタブーとなっていて、誰も表だっていう者はなかったのである。それもそのはず。それは身体の不調などによって引き起こされる病ではなく、いわゆる、魂の病、つまり、精神疾患だったからであった。

伊佐雄は目の前が真っ暗になってくらくらするような印象を受けた。

意識朦朧と云うわけではないけど、どことなく落ち着かなくて、そわそわしつつ、気持ち沈みこむようで、頭の中がぐにやりと變形していくように思える。

いけない。そう思いながら、伊佐雄は最前見た祖父の寝顔が頭の中に映像として浮かぶのだった。死と云うものを見つめるには格好の場面であるが、伊佐雄は深層心理の底の底でそのことを拒否し続けていたのだ。それを唯の一言で浮き彫りにされて、伊佐雄は酷く弱りつつあった。

四

あの精神疾患は祖母が亡くなって少しした頃の出来事だった。

自分のなかではあのとき思い悩んでいた問題に対しては決着がついていたように思っていたが、いざ、妹にそう云われて見ると、なかなか根深い問題であると考えさせられる。あのときの中心的な問題はなんだったのか。細かく分ければいくつにも答えられるけど、その中でももつとも大きな悩みだったのは、どうして人はこんなにもあつけなく死んでしまえるのだろうか、いったい人とは、どれほどに無力で、はかない存在なのだろう、という疑念を、祖母の死と結んで深く考えすぎたのであった。

「俺は死が怖いわけじゃない」伊佐雄は唯に向かって声を張り上げた。

「むきになってるところが、疑わしいのよ」唯の追求はきつい。

伊佐雄は落ち着いて考えを巡らせる。

祖母が亡くなった時、自分は死について何を考えたか？

自分がいずれは死なねばならぬ存在であるということに対しての恐怖心よりも、それまで身近にいた人たちがあつけなく命を落とすことがあるという事実から立ちのぼる自身の無力感が恐ろしいと感じられたのである。

「唯は死をどう思ってるんだ？」

伊佐雄は普段訊きにくかった、しかし、いつか訊いてみたいと思っていた質問を妹に投げかけた。唯は兄の言葉にうろたえたが、それでもしっかりと語調で返答を試みた。

「私のことを云えば、死に恐怖を抱くよりも、生を渴望して、燃やしつくして、一生を終えようとする勇猛心の方が勝ってるわ。なんていっても、生を喜ぶということが大切だって、慈正寺の和尚さんも仰るし。私、あのお祖母の三回忌の法事のとくに聴いた和尚さんの法話が忘れられなくてね。それ以来、あの言葉にはとても励ま

されてるわ」

「ああ、それは父さんから聴いたことがあったな」

「父さんから？ お兄ちゃんはそのときいなかったんだっけ？」

「俺は読経が終わった後、なんか虚しくなって自分の部屋に籠ってたんだけ。三年も経ってるのに、俺はちつとも成長してない自分の心を虚しく考えていたし、なんか法事の雰囲気が好きじゃなかった。また今度、お祖父が亡くなってしまったら、あの和尚さんの話を聴かなければならないことが苦痛に思えてきてね。いまから気が重い」「やっぱりね」唯は声を低めて告げた。「お兄ちゃんは今もうお祖父が亡くなることを前提で話してるよね。気持ちの上で、もう諦めてるんだ」

「だってそうじゃないか」伊佐雄はむきになる。「お祖父はもう長くないよ。お医者さんも云ってたろう？ 『今度、大きな波が来たら危ない』というのを覚悟しておいてください」って」

唯は悲しげに目を伏せた。

「でも、まだ望みが完全に潰えたわけじゃないでしょう」

「そうだけど」と伊佐雄。

「確率がパーセントでも残ってたら、それに賭けないとあとで悔やむことになるわ」

「悔やむ、だって？」

伊佐雄は妹が何を云おうとしているのか分からなかったが、しかし、女性らしい心の込め方だということはうっすらと理解されるのだった。

「もしお祖父が亡くなって、いろいろな思いが去来するようになれば、いずれ、生あるものの前に立ちはだかる死というものに対して、諦めの気持ちをもって臨んだことが魂に於けるマイナス点となって、自分の因縁を救い難い物にしてしまうんじゃないかしら？ 慈正寺の和尚さんもそんなことを話されてたわ」

「また法話か」

「法話だからどうってわけじゃない。そう云う話には云ってる人の

心のあり方や意見の正しさみたいなものに重きを置いて聴くようにしてるのよ。そして、この話は傾聴に値すると思ったから、あれから何年も経つのにまるで昨日のこのように思い出されるってわけ」「なるほどな」伊佐雄は不満を残しながらも大筋では話に同意する。「結局、唯は死を受け入れたくないだけなんだよ」

「そ、そんなこと」

酷な云い方だとは思ったけれど、伊佐雄は妹にそう告げた。

唯は悲しげに視線を落として、しばらくそわそわしていた。

「お祖父のことですらいろいろ悩んでるのは、俺も唯も一緒ってことだな。生に拠るか死に拠るかの違いはあるけど、とにかく、お祖父の死は避け難いものだってことはわかってるわけさ。認めたくないだけなんだよ」

唯はまなじりをきつと上げて、兄を見た。

伊佐雄は妹の表情にどきりとさせられる。何か底の深い、恐ろしい、空虚なものが感じられたからである。それで、彼は無理から言葉を継いだ。「お祖父のことは難しいと思うけど、これからのことを考えないといけないのは分かってるか？」

伊佐雄がそう云うと、唯は怪訝そうな眼差しで彼の方を瞞めてくる。

「これからのこと？」

「ああ、お祖父だって、これからあと十年も二十年も生きていられるわけじゃないんだ。今回のことでもう氣息奄々なのに、これ乗り越えたとしても、第二波、第三波を乗り越えられるとは思えない。そろそろだということを意識しておかないと、もしものときに立ち直れないほどショックを受けることになりかねないよ」

そこまで伊佐雄が云ったとき、横から父の雄大が口を挟んだ。

「伊佐雄、お前もなかなか肝の据わったことを云うようになったな」雄大の口調はまるで息子の成長を言祝ぐかのようで、実父が死の床についていることを思わせない様子のものであった。

「確かに俺も、お祖父が倒れて危ないということ知らされて気落

ちしたこともあったんだ。でも、いろいろ考えて悩んでるうちに、お祖母のことを思い出した。あのとき、俺はそんなに嘆き悲しんでたか？ ってな。残される者にとって、身内の死は辛い物に違いない。しかし、それは親子として縁を受けてからこつち、いずれは経なければならぬ変転という感じで、自分の中に親の死を受け入れる核みたいなのが出来上がっていくのを感じ取っていた。俺は大丈夫だ、親が亡くなってもやっていける。そう思えるのは、自分の周りには伊月や伊佐雄、唯がいるという意識からなんだ。親と子とは違うと思うかもしれない。でも、同じなんだよ。そして、俺はそこにできた心の余裕で、お前たちの心中がどんなものであるのか考えてみたりもするし、お前たちから見た、曾祖父母、つまり、俺の祖父母だけど、あの人たちが亡くなったときのことをいま思い返してみるんだ。あのとき、俺はどういう意識に苛まれていたんだっただかな、ってね。それで思い出したことがある」

「思い出したこと？」と伊佐雄と唯は目を合わせた。

父の話がどこへ向かおうとしているのか分からなかった。ただ、父が、何か自分達に伝えたいことを持っていると言っただけが伝わってきた。

「伊佐雄、唯」と雄大は続ける。「俺はな、自分の祖父が亡くなった時、この世が終わりを迎えつつあるというような着想を抱いていたんだよ。それは身内の死というものに対して、あまりに強烈な反応の仕方だったように思えるんだ。祖父ちゃんは堅実な市役所での仕事勤めだったけど、亡くなる前の数週間はいろんな人が見舞いに来てくれた。もちろん、葬儀のときにも沢山の人が出席してくれて祖父の菩提はしっかりと弔われた気がしたもんだ。でもな、いま考えてみると、そんなものは幻のようなもので、本当に大切なのは家族の愛情の持つていき方じゃないかと思わせられるように今はなった。その心境の変化は、祖父が亡くなってからの自分のなかでの一番の変化であったように思うんだ。お前達も今回の源一祖父さんの死期にあたって、いろいろ考えることがあると思う。でも、決し

て、その悩んだことを無駄にするな。これからの人生にきつというんな示唆を与えてくれる好例だと思うから。そんなことだけ、お前達に伝えておきたかったんだ。うん、それだけだ」

雄大はそう云うと、なおも何か云いたそうだったが、それ以上は口を閉ざしてしまった。

雄大の言葉に二人の子供は何も云えなくなってしまった。

ゆっくりと進み行く時間は辺りに沈黙の帳をおろして、リビングにかけられている時計の十秒ごとに動く長針の動作音ですら聴こえてくるほどだ。誰も口を開かなかつた。押し迫るでもなく、引き退るでもなく、ただニュートラルな時間の流れだけがそこには存していた。

伊佐雄はゆっくりとさっきの話を反芻していた。

身近な人の死について。

残された親族の悲しみの深さについて。

いったいいつまでこんな間延びした時間を過ごさなければならいいのかという思いを抱いてしまう自分の薄情さについて。

何か自分が大掛かりな陥穽にはまってしまったような印象を抱く。穏やかな気持ちで過ごしたいとの思いに反して、現実には、いろいろと難しい。

死というものについて考えてみる。

生きていることをやめてしまう状態。

一度死んでしまうと、二度と元の状態には戻れない。

それは終わりなのか、始まりなのか？

死に美醜の差はあるのか？

じつと考えてみる。しかし、考えは纏まらない。

それで今度は、

水というものについて考えてみる。

透明性の象徴。

人体の大半は水分から成り立っている。

水蒸気にも氷にもなる変幻自在の無機物。

つめたい水、あたたかい水、綺麗な水、汚い水。

死と水の相性を考えてみると、その思考法はかなりしっくりくるものになりそうだった。伊佐雄は沼や湖に生きる生物が、死によって生命活動を停止し、水底へ落ちていく様を想像して見た。死という不可避の出来事によって生命活動を停止した生き物の身体は、水の中のさまざまな微生物によって、骨以外のすべてを分解させられて、水と溶け合っていく。

古の兵士たちは、川や海にその遺骸を破棄させられて、水と斉しくなっていたのではないか。そんな風に考えてみると、若干の怖気とともに、それを受け入れる気持ちもまた存在していることに気づかされる。

祖父も亡くなったら、その遺骸を湖水に沈めれば、最高の供養になるんじゃないか、と伊佐雄は、唯が聞いたら、物凄い剣幕で叱られそうなることを考えていた。火で焼却するか、水で分解するかの差である。間をとって土に埋めるという手段もあれど、それはまた意味合いが変わってくる。

そもそも、現代の日本の法制下にあつてそんなことが許されるはずもなく、伊佐雄はその考えを棄却した。

その時、唯が伊佐雄に「ねえ、お兄ちゃん」と言葉を振った。

「どうした？」と伊佐雄は訊ねる。

「やっぱり、お祖父助からないのかな？」唯は自信なさそうに云う。伊佐雄が死と水のことを考えていたのと同じ時間を、唯も唯なりに自分の考えを進めていたようである。

伊佐雄はゆっくりと考える。

唯のことを考えれば、この妹が元気を取り戻せそうな希望のある

答えをするのが良いように思えるが、しかし、甘い言葉だけを聞かせて安堵させることは不公平な気がした。それで伊佐雄は少しづつきらばうとも思える発言をする。

「たぶん、長くはないだろうな」

それは突き放すような言い方だったため、唯は一瞬顔をしかめて、次の瞬間、泣きそうな表情をした。

「やっぱり、そうなのかな」唯は声を落とす。

「お祖父のことを思えば、こちらでふつと天国に旅立った方が幸せかもしれないよ。老醜をさらすという言葉もあるとおり、これ以上生きつづけるより、さっと亡くなった方が、どちらにしても楽だからね」

「お兄ちゃんって薄情なんだね。あれほど可愛がってもらったのに、いまでは掌を返したように、お祖父の死を願ってる」唯は寂しげに目を細めて、窓から見える庭に視線を据えた。

伊佐雄は唯に導かれるように、自身も庭に視線をやった。

二、三の花が花卉を広げ、立派に咲き誇っている。

伊佐雄はこの花に関連して、別の着想を得はじめていた。

花は咲き誇る。その華やかな匂いに惹かれた小虫たちを介して受粉を行い、それに成功したらすぐ、花卉を悄れさせ、種を作ること集中する。それが大自然の、常に変わることはない営みだ。人もまた、配偶者を得、子を作り、資産を残すことで家をつないでいくと努力する。そこには、やはり花と同じく自然の大きな意思というものが介在しているのだろうか？

源祖父もその道を辿ってきたわけだ。

老年は人を枯れしぼませて、枯淡という言葉に彩られるように、朽ちていくのがいいのかもしれない。祖父はもう助からないだろう。これ以上生き延びても、老醜をさらすだけに過ぎないだろう。伊佐雄はそう思う。

「唯」と伊佐雄は妹の名を呼ぶ。

唯は返事を返さず、庭に向けていた視線を、ちらっと兄の方へ飛

ばす。

「お祖父はきつと、このまま亡くなった方が幸せだと思つよ」

伊佐雄はぼそりと云った。

「どうして、そんなこと云うの？」と唯はまったくそのことを受け入れられないようだった。

「だって、もうそれは厳然とした事実みたいなものじゃないか。時間は一方向にしか流れないんだ。老いた人というのはその一方向に流れていく時というものを一番に享受する者じゃないか」

「そんな言い方はないんじゃない？」唯は声を押し殺すように云う。「わからないか。唯は現実を受け入れることを拒否する心でいつぱいになつてるんだよ。そんなことでは、これから先、ショックなことがあるたび、自分の気持ちを入れ替えられずにダメージばかり受けるようになるぞ」

「そのどごが悪いのよ。悲しいことは悲しいし、苦しいことは苦しいのよ。悲しい時に悲しいと云えないようなそんな状態に自分を追いやるなんてできないわ」

唯はむきになっていた。

「なかなか難しいな」と伊佐雄は声を漏らす。

「難しいというより、お兄ちゃんが冷血漢つていうだけだわ。本当に、私と同じ血が流れてるの？」

「厳しいこと云つてくれるな」伊佐雄は苦笑する。

「お前らの話を聞いてると、やっぱり祖父さんのことを思つてくれるのがよくわかるよ」父の雄大が声をかけた。それは一向に意見の交わらない二人の子供の間に割つて入つて、仲裁するような形になった父の言葉だった。「確かに伊佐雄の言葉はお祖父のことを思つてないように見えるかもしれない。でもいずれ亡くなるんだつたら、早くあつさりと苦しむことなく亡くなつてくれた方がお祖父のためになるだろうと考えるてくれるらう。一方の唯は女性らしい心の優しさで、死を受け入れたくないという気持ちとともに、最後まで希望を捨てずに、お祖父の恢復を祈るべきだという。二人と

も、お祖父を思う気持ちは誰よりも強いことがわかるよ」

伊佐雄と唯とは父の言葉に耳を傾けた。

父の言葉がどこに向かおうとしているのかしっかりと確かめるため、その話される内容を訊き洩らさないように慎重に聴き続ける。

「でも、駄目なのは俺の方だ。どうも、身内の死に慣れ始めてる。

お前たちの曾祖父母の臨終まで見てきてるから、死とはこんなものだという固定観念に付きまとわれて、それは諦めの気持ちと一緒になってる。そんなことでは、不孝な子供だと云われても仕方ない。恥ずべきことだとは思っただがな」

雄大は悲しそうな表情で、伊佐雄と唯を見た。

伊佐雄は父の表情の中に諦め以上のものを見出した。

それは強い信念の光のようなものだった。

その信念は、やはり、源一を思う気持ちであるにちがいがなかった。

「父さんも十分、源祖父のこと思ってるよ」伊佐雄が助け船を出す。

「そうでありたいとは思ってるんだ」雄大は声の調子を落として云った。

伊佐雄は雄大の介入で、唯との云い争いにも一区切りがついたと安堵し、それから最前いわれたことについて、考えはじめていた。

つまり、精神疾患についてである。

いまはもう発作が起きるとか、そう云うことはなくなった。しかし、いまでもあのときのことを夢に思いだすことがあったし、寝ているときに限らず、部屋でじつと物を考えているときに思い出される感興などもあったのだ。伊佐雄は意識をそちらへ流していく。

いったい自分は死というものにしっかりと対面したことがあったか？

死は生きている者なら皆にいずれ訪れる、平等で不変で対等な状態である。それは終末であるのか、発展であるのか、転機であるのか。生きている者にはまったく意識することのできない概念である死というものの本質。

人が皆死に絶えた世界というものがあっても、そこには滔々と流

れる水の動きがあつて、世界は相変わらず、北極と南極を軸にして同じように周りつつけることだろう。水を廻る旅に終わりはないとは、子供のときに読んだ絵本に書かれてあつた哲理である。水と人生、絶えざる変転、変化、飛躍。人生で起こることの多くは、人に特有のものであるが、人もまたさまざまな縛りによつて、自然物と同じ生を生きることを実感することになる。つまり、食物摂取である。他の命であつたものを食ひ、水を飲み、なんとか一日を永らえることに成功する「人」という存在。

　　いつたい生とはなんなのか。

　　自身の死を思つて亡くなる直前、仲間の誰もいない場所へと姿を消していくと云われる象のように、人間にも死者の谷が古来、存在していたのかもしれない。そんな着想を得て、伊佐雄は背筋に怖気がした。いつたい、人は死をどれだけ身近に感じる事ができるのか？ 人は自身の死を冷徹な視線で眺められるものか？ そんな疑問が脳裏をよぎる。

　　いけない！ 伊佐雄は意識した。

　　これ以上考えていると、頭がおかしくなりそうだ。

　　伊佐雄はあわてて、現実に戻つた。

　　向かいには唯が座つていて、餅菓子を食べている。

　　伊佐雄も同じものを手に取り、袋を開けた。

　　雄大がテレビを観ている。いつテレビがつけられたのか、まったく気づいていなかった。

　　よくない兆候だ、と伊佐雄は思う。

　　時間だけが重つたるく過ぎていった。

五

家族全員で海水浴に行った時のことを思い出す。

伊佐雄はそのときいつも以上にはしゃいで、そのときまだ十代前半だったのだが、祖父母も元気で、文字通り家族全員での海水浴となったのだった。祖父くらいの年齢で海水浴に来る人も珍しかったが、祖父はそんなことにはまったく頓着しないらしく、いつもどおりの豊饒とした様子で海に入り、適度に身体を動かして楽しんでいた。

祖父の身体はしっかりと鍛えたもので、それには、学校の教師という職からは連想できないような、家に帰るまでの一、二時間を常にトレーニングジムで身体を鍛えることに充てていたことから分かる通り、年の割にはかなり俊敏な動きも出来たし、若い者には負けてられんという気持ちの上での勇猛心が勝っていたのだった。その祖父が床に就くようになってしまったのは、何かの菌が脊髄に入り込んだとかで、自分では身体が起こせなくなってしまったことが原因だった。

海水浴では唯の水着姿に驚かされたな、と伊佐雄は思い出し笑いをする。

「なに考えてるの？」リビングでテレビを見ている唯が話しかけてくる。

「いや、前に行った海水浴のことをな」

「海水浴、いったいいつの？」

「お祖父たちも一緒だったときのさ」

「ああ、私がまだ中学生だった時のあれね」

「そうそう」

「お兄ちゃん、水着の女の人ばかり見てたよね」唯はくすくす笑う。

「うっさい」伊佐雄はむっとした口調で突き放すように云う。

「あはは、冗談よ」唯は会話を楽しんでいるのか、よく笑う。「でも、あのとき、お祖父とお祖母、ちよつと変だったよね」

「変？」

「うん、なんかお祖父は最初、海に入って泳いでたみたいだけど、お祖母は何もしないで、ただ静かに海に見入ってた」

「そうだったけ？」伊佐雄はしばらく考えてみたが、そのときのことを思い出せない。

「んー、なんていうか、ただ雄大な景色に打ちのめされるしかない観光客みたいな感じでさ、私、気になってたんだけど、どうしてもそのことをお祖母に訊ねられなかったんだ。そのときは不思議だったけど、でも、いま思えば、なんとなく諒解される出来事でもあるのよね」

「諒解できる？」

「そうね、云ってみれば、お祖母もお祖父も水というものに囚われていたわけでしょ。その水の母体ともいうべき海を見て、何も思わないわけがないじゃない。きっとお祖母は海に何かの憧憬を持ってたんじゃないかしら？ もちろん、私たちにはその細部はわからないけど、でも、そう云う気持ちがいっかりと透けて見えるって云うか、きつとそうだったに違いないって思えるだけの根拠は準備されてるでしょ」

「そうだな」伊佐雄は納得する。

しばらく彼は考えていた。確か祖母だけじゃなく、あのとき、源一お祖父も、何か感慨深そうに海を見ていたんだっけな、と。

半時間ほど海で泳いだ後、渚に戻ってじつと並んで座っている祖父母の会話のいくつかが耳に入って来たんだ。

あのとき、祖父母はこんなことを話していた。

『なあ、祖母さん、あの遠い水平線の向こうに太陽が沈むわけだけど、いったい、水はどこまで大きな広がりを持つてるんだらうな？』
『なかなか難しいこと云いますね』

『僕らは二十世紀に生きとるわけだから、地表に海水がどれだけの割合を占めているかなんてことすら分かってしまっているわけだけど、それ以前の、まだ科学の発達していなかった時期の海水に対する意識ってどんなものだったのか、と最近思ってたな』

『はあ、水ですか』

『水はなかなか難しい問題を孕んどるよ』

『そうなんですか？』

『ああ、水が近くにないと人は滅んでしまう。反対に水が多すぎると災害に遭う。水というのは常に適度な量だけ近くにあるのが最良の状態なんだよな』

『毒にもなれば薬にもなるといふ奴ですか？』

『ちよつと譬えがおかしいけど、そういう感じだな』

『そうですね、どちらの側面も持っているのが水というものの特質かもしれないね』

伊佐雄はその時のことを詳しく憶えていた。

他のことはずいぶん忘れてるのに、この『毒にもなれば、薬にもなる』と云う言葉自体になんらかの記憶に強く影響を及ぼす作用があったようで、伊佐雄は、その言葉を事あるごとに思い返すのだった。

『お祖父とお祖母が自分たちとは異なるところに意味を持ちあわせているような気がしたのもあのときだったな』伊佐雄はそんなことを口にする。

『異なる？ 意味？』と唯は怪訝そうに尋ねる。

『うん、子供って楽しかったら、それに没頭して、時間を経つのを忘れて打ち込むだろう。でも、ある程度、年のいった人ってのは、そう云う気持ちからは離れていってしまうものだよ。他にいろいろと考えなければならぬことがあるから、ひとつのことに没頭することができないのが、年取った人たちの宿命なのかな、と思うわけだ』

「確かにそう言う面はあるかもしれないわね」

伊佐雄は父の後で、風呂に入ることにした。

唯は相変らず、リビングでテレビを見ながら、思案顔をしている。伊佐雄は風呂につきりながら考えた。

どうしてこんなに水のことを考える一家に生まれてきたんだろう。お祖母も水。お祖父も水。そして、父も水に関して、何等かの考えがあるらしい。伊佐雄は手をくつつけて湯を掬った。そして心持ち上に動かし、そこから徐々に湯を落とす。柔らかい水だ、と彼は思う。この温かい水と、お祖父が病床で欲しがった雨水。これは同じ形態の水なのか。この全体を包み込むような温かく優しい液体と、冬の寒い時期に凍りつくような温度で落ちてくる雨水、すべてを停滞のうちに押し込めようとするような固く冷たい水との対比に、伊佐雄はめまいを覚えた。

祖父母の意識の中で雨水とはどんな存在であるのか？

祖父と祖母の間でも、意見の相違はあるだろう。

祖母はきつと秋の雨が好きだったのだ。そう思う。そして、源一お祖父はきつと伊佐雄が中学のときに行った 倚天の滝 で受けたような、あの暑い気候の中で浴びるシャワーのような涼味たっぷりの雨をこそ好きであろうと予測された。

それは一方的な押し付けに過ぎないのかもしれない。もし、祖父がしつかりと喋れて、こちらの問いかけに答えられるような状況だったなら、答えはまた、違っていたかもしれない。しかし、いまではそれは望むべくもなかった。

ただ身振りで、雨水が欲しいということだけが分かっていただけで。

風呂の中で思案していると、ふつと気づく。

水という言葉の憧憬のものは、母胎にあるのかもしれない、と。

老人になると、だんだん、赤ん坊の世界に帰っていくといわれる。もちろん、身体が縮んでいくようなことはないから、大きさはそ

のままであるが、その能力において、老人は赤ん坊に等しくなっていくといわれる。そして、死と云う出来事は、母胎から脱出して生を得る赤ん坊とは、まったく真逆の方向に意味を転換する。身体的には死への没入であるが、それは一種の入水と違っていいかもしれない。母親の羊水の中へ潜り込んでいく印象。そのときのキーワードも水なのである。水、水、水。水は果てしもない意味を持ち得る存在かもしれない。

しかし、意味は人の周りを十重二十重に取り巻きながら、その実、本質はひとつでしかないのだろう。つまり、意味を難しくしているのは、ひとり、人間のわがままに違いない。

祖母のあの海水浴での海に向ける柔らかな眼差しは、母なる海への永劫回帰への憧憬、あるいは希望であったのではあるまいか？

いま病床で祖父も水に対する憧憬を覚えているようだ。

いったい、何の因果なのか？

その時の伊佐雄はそんなことを考えていた。

そして、その時のことを思い返す現在の自分にとって、祖父の死が自身に与えた影響とはいったい何であるかということ、祖父の死後数年たつこの現在の自分に振り返って思うのである。

祖父や祖母、いや、もつと大きな、この一家に纏いついた因縁と
いうくりで観たとき、慈正寺の和尚さんが云われるように、自分の家に巢食った魑魅魍魎的なものの存在を色濃く感じてしまい、憂鬱な気分になりそうになる。

慈正寺の和尚さんは、龍神様にお祈りして先祖を供養するようにとよく云われていた。

云いつけに従い、施餓鬼をしつかりとこなして万事遺漏なく執り行うようにしているが、目に見えて、水に対する因縁の強いこの一家について、和尚さんが云われるには、この家は昔は大分栄えていたかもしれない。しかし、水に関する利権で周辺の住民とのごたごたが続く、村単位で水の確保に血道を上げていた時代があった。そのときに、情け容赦なく水を独り占めしたのが、この家の主人であ

った、伊佐雄たちの祖先であると告げられたのだ。

どうしてそんなことが平成の今の世に生きる和尚さんの頭に浮かぶのかわからなかったが、ありがたい教えを長年実践とともに修してこられた修行の成果であり、我々凡人にはまったく及びのつかない世界であろうと思われたので、伊佐雄はその話をただただ無批判に受け入れていた。

伊佐雄の父雄大も慈正寺の和尚さんのことは買っているらしく、いつも報恩講などを聴きに行っては、その話を土産物であるかのようになんか得々として息子・娘に話すのだった。

毎日風呂に入る時、お祈りの言葉を唱えるように和尚さんに云われていた。

真言の一種であったのだが、伊佐雄はそれを口にして、今日も入る。

意味はわからない。意味はわからなくとも、やった方がいいと言われれば、賛んでやるといふ素直さが伊佐雄の長所でもあった。

祖父が病床でじりじりと水の飢渴に苦しんでいるとき、伊佐雄はコップに牛乳を飲んで飲んで飲んでいた。何かしたいと思っても、祖父のためになるようなことは思いつかなかった。母は何も云わない。父も何も云わない。子供である伊佐雄と唯だけが気をもんでいるのである。伊佐雄は気持ちがあつていく思いがした。張り詰めているような緩んでいるような、どちらともつかない緊張の糸が、だらしなく垂れ下がっているかと思えば、肩の筋肉がつっぱるように、どこか異常な感覚で引つ張られる印象を覚える。

「お兄ちゃん自分か亡くなる時、お祖父ちゃんみたいに水が欲しいって云うと思う？」

唐突に唯が訊ねてきた。

伊佐雄はそれに返答する。「わからないな。云うかもしれないし、云わないかもしれない」

「それじゃ、わかんないわよ」

「じゃ、唯はどうなんだ？」

「私はこの家から出ていくことになるんだから、多分、大丈夫じゃないかな」

「でも、いったいこの家には何があるって云うんだろう」伊佐雄は心配そうに表情を曇らせたが、それは後年、慈正寺の和尚さんがいったような因縁の話をされる前だったから、疑念だけが頭の周りをぐるぐると渦巻いているような形だった。

唯の顔には疲弊の色が見えていた。

「いったいどうすればこの現状を打破できるのか。」

唯はいらぬ苦勞をしているようにも見える。祖父のことを祖母の亡くなった時の印象と結んで、もう二度と、あの悲しみは見たくないともいうような、そんなある種の依怙地な気持ちを胸に抱いているように思える。

「残されるのは俺たちなんだ。祖父さんじゃない。あれこれ悩むのはやめよう」

雄大がそう云って、鬱々した気分を解放しようとした。

伊佐雄はもう少し祖父のことを考えていたかったが、それも叶わないと見て、もうすぐ夕食の準備の出来る食卓の方を見ていた。

「ねえ、父さん」そのとき唯が話しかけた。「私、もう一回、お祖父のところへ行って来る」

伊佐雄はそれを聞いて反応した。「俺も行くよ」

「性のないやつらだ」父は苦笑まじりに肩をすくめる。「もうすぐ御飯だから、遅くならないようにな」

唯と伊佐雄は源一の寝ている部屋までの廊下の電気をつけて、静々と進んでいく。

「お兄ちゃんもくるなんてね」祖父の部屋の扉を開ける時に唯が口を開いた。

「俺もちよつと気になってたんだ」伊佐雄はそう返答する。

源一は寢息を立てて眠っていた。二人は源一を起こさないようにゆっくりと部屋の中に入り、近くに正座した。

「お祖父ちゃん、眠ってるね」唯が云う。

「そうだな」と伊佐雄。

しばらく二人は源一の寝顔に見入っていた。

「不思議ね」と唯が云う。

「何が？」

「お祖父ちゃんはこんなに弱ってるのに、まだ心のどこかで大丈夫、まだまだ生きてくれるって思ってる節があるの。私の心の中でね」

「そうか」

「でも、心のどこかではわかってるんだ。もう駄目なのかもしれないって」

「そういう境地に辿り着いたわけか」

伊佐雄は大きく息を吐いた。

「でもね、残される私たちが後に残る虚無をどう受け入れるか、それを思うと、これからの日々は火が消えたようになってしまったんじゃないかって思うのよ」

「考えすぎだよ」と伊佐雄は慰める。「お祖母が亡くなったときだって、みんな粛々とそれを受け入れて、これからの生活に希望を託してたんだから。それに、俺だって唯だって、そのうち結婚して子供を作ることになるだろうし、そうなれば、父さんだって母さんだって俺たちだって、身内が亡くなるだけでなく、新たに身内が誕生するって云う喜びに包まれるわけだろう。そのことを思えば、この世は悲しいことばかりじゃないってことに気づくと思うけどな」

「そうね」唯は泣きそうな表情を一瞬緩めた。「たしかにそうかもしれない。私達はそれぞれに子供を作るかもしれない。でも、お祖父ちゃんという人間は一人しかいないのよ。お祖父ちゃんはこれでもう亡くなっちゃったら、もう会うことができないんだよ。子供の頃から、ずっとよくしてもらってきたのに、これからだっていうのに、何もできない無力感は大きいよ」

「そうだな」伊佐雄は納得する。

唯がこんなにも思いつめていることに伊佐雄は強い印象を抱いた。

どうすれば唯の心に希望の光を宿せるのか。それを思いながら、伊佐雄は何もできない自分の無力さを嘆いた。

「お兄ちゃんは強いね」唯が声を掛けてくる。

伊佐雄は首を横に振った。「強いんじゃない。薄情なだけなんだ、きつと」

唯は何も答えなかった。

「唯を見てると、そう云う反応をすることこそ、家族のあるべき姿のように思う。よくしてもらったお祖父に最期ของときが訪れるかもしれないってのに、こんな反応しかできない自分はなんて薄情なんだろうって、思いはじめてる。難しいな、唯。こんなことじゃ、俺はいつたい何のためにここに生まれてきたのか、わからない気がするよ」

「悲観しないことよ」と唯は云う。

「唯……」伊佐雄は妹を改めて見る。

「ゆっくりと考えてみて」唯は言葉を続ける。「お祖父のことを思っていないって、お兄ちゃんは云うけど、その言葉、お祖父に聴かせたら、お祖父はきつと悲しい顔をすると思うわ。それは孫が自分のことを思ってくれてないからする表情じゃないと思う。それはね、孫が自分に向ける気持ちの本質に気づかないままにしていることに対する悲しみの表情なんだと思うの」

「気持ちの本質？」伊佐雄は訊ね返す。

「ええ、気持ちの本質。お兄ちゃんは誰よりもお祖父のことを好きはずよ。子供の頃からいつもお祖父と一緒にだったし、どこへ行くにしても、お祖父の後を付いて行ってた時期があっただでしょう？」

私はそんなことあまりなかったから、どっちが薄情かって云ったら私の方かもしれない。そんなことは考えるだけ仕方ないことなよ。私はいま自分ができる精一杯でお祖父のことを愛そうと思ってる。お兄ちゃんもそう云う気持ちでいるのがいいと思うわ。何も、行動で示す必要はないの。思いが重要なんだから。そこまではわかってくる？」

唯の真剣な言葉に、伊佐雄は心打たれていた。

この年になつて、妹から教えられることが多いと云うのは、また感慨深いものがあるな、と伊佐雄は考えた。

そんなやり取りをしていると、やがて、部屋がノックされた。

「はい」と唯が返事をする。

「御飯だよ。食べに来なさい」父の声がある。

「お祖父ちゃん、行つてきます」唯が言葉を残す。

伊佐雄は何も云わず、ただ寝息を立てている祖父の顔を一瞥してから、部屋を後にした。

食事はそれほど豪華という訳ではなかったが、それなりにうまい料理が多かった。筑前煮は味がしっかり沁みている、野菜が甘かった。サラダは青々として、みずみずしい。味噌汁はあさりが入っていて、貝の身はぷりぷりと歯ごたえが良いし、磯の香りが滋味豊かであった。

会話はそれほど交わされなかった。

誰もが祖父のことを心配しているような顔つきで、それぞれの顔には諦念の色が見えていた。

父の雄大はアルコールを飲んでいて。

焼酎の水割り。それも半年以上も前に買って調味料置場の隅に眠っていたのを出してきて飲んでいたのであった。

「父さん、お酒飲むの珍しいね」と伊佐雄は口を挟んだ。

「ああ、飲まないが悪くなるからな」

雄大の声には無理に張り上げているところが、わざと気を大きくしているのがわかった。

「伊佐雄」と父が云う。「お前も飲まないか？」

父の誘いに初めは断ろうと思ったが、しかし、父が酒を勧めるのは珍しいことであつたので、相伴することにした。

椅子から腰を上げ、食器棚に向かうと、手頃なタンブラーを手に取り、冷凍庫を開けて氷を数個入れ、水は入れずに戻ってきた。

「オンザロックか」と父は嬉しそうに反応を返す。

伊佐雄のタンブラーに焼酎が注がれ、彼はそれをゆっくりと口に含んだ。

その夜、伊佐雄は勧められるままに何杯も飲んだ。次の日、二日酔いになったのは当然である。

六

数日後の木曜日、祖父は亡くなった。

享年八十歳の大往生であった。

金曜日は友引に当たっていたので、葬儀は土曜日に持ち越されることになった。

通夜の席上で、伊佐雄はいくつもの見慣れた顔と、まったくこれまでに面識のなかった顔とを見つけていた。

「このたびは突然のことで驚いております。常々、顔を見せに寄りたいと思っていましたところなのに」と見慣れない顔の人物が口上を述べると、両親は、葬儀のときにありがちの対応をしているのだった。「わざわざ遠方より来てくださって、父も喜んでいることでしょう」雄大はそう言つて、悲しみの表情をして祭壇を見やる。

「お祖父ちゃん、とうとう逝っちゃったんだね」

唯は元気をどこかに取り落としてきたような表情をする。

「仕方ないよ。盛者必滅つて言葉があるくらいなんだから、いずれは生きている人間は死ななければならぬ。だから俺たちは、一日一日を大切に生きていく必要があるんだよ」

「でも、私、こんなことは受け入れられないわ」

唯は涙を流した。

その様子に、伊佐雄は云いようのない怒りを覚えていた。

ぐずぐずと何時までも一つところに留まっていられる精神が伊佐雄には我慢ならなかった。ここが通夜の席でなければ、すぐにでも妹を立てさせて、やるべきことに身を打ちこませるのに、と考えていた。そこには兄妹間に芽生える愛情とは真逆の精神があった。

「唯、めそめそするのはやめておけ」伊佐雄は兄らしく毅然と云い放つ。「ほら、化粧も落ちかかっているじゃないか」

伊佐雄の言葉に、唯ははっとして、自分の顔のことに意識をやったようだ。

「ちよつと行つて来る」と云つて、妹は洗面台に通じるリビングの方へ向かった。

伊佐雄は親戚のおじさんおばさん連中が集まっている方にさつと視線を投げた。

雄大の弟である清吉が伊佐雄の視線に気づく。

清吉は静岡市に居を構え、小さな町工場を経営している人物だった。

「清叔父さん」と伊佐雄は声をあげる。

「久しぶりだな」と清吉は相好を崩す。

生前の祖父とはある種の確執があり、なかなかこの家に帰つてくることがなかったのだが、肉親の死というものはそんな垣根などすつぱりと取り払うのが普通であり、叔父は、取るものも取りあえずという感じで、この家に真つ先に駆けつけた人物だった。

「お祖父はどんな亡くなり方をしたんだ？」と清吉は訊ねてくる。

「眠りの中でふつとあの世に行つてしまふようなあつけない最期だった、と父は云つてます」

「俺たちはまだ大丈夫だ、まだ大丈夫だろう、と思ひながら、騙しだまし、日を過ぎてたんだが、実際、これは因縁のなせる所業だったのかもしれない。いらなるところで意地を張つてしまった。伊佐雄も大人の人情の機微みたいなものがわかる歳になつただろう？

そこで、俺はあまりこの家に寄り付かなくなつていたんだが、それは源一お祖父との確執がそうさせたのだけど、実際、お祖父がなくなつてから考えると、どうしてこんな些細なことでお祖父との間に壁を作つてしまったんだろう、って思えてくるんだよな。伊佐雄意地は張らない方がいいぞ。なんでも、大きな器を想像して、その中で繰り広げられる愛憎の劇場に心をとらえられるんじゃないやなくて、器全体を見回すんだ。吟味し、精査する。そして、こうと自分が思つたら、絶対にぶれないように心掛けるんだ。俺は強く思つたね。意地を張り過ぎることは、とてつもない迷盲をおびき寄せる。自分の素直な心に従うべきだ。うん、そのことを忘れちゃいけないよ」

「気を付けるよ」と伊佐雄は返答する。

これも叔父ならではの意見、経験から導き出した、決して不真面目なところから出た考えでないことがわかった。

清吉はそれだけ伝えようと、また親戚の輪の中へ戻っていった。

伊佐雄はしばらく放心していた。

それで、唯が戻ってきたことになかなか気づかなかった。

観ると、唯がすぐ側に正座していた。

「唯」と伊佐雄は名を呼ぶ。

涙で崩れていたメイクはしっかりと整え直されていて、生まれ変わったように見栄えのするものになっていた。

「もう泣くんじゃないぞ」伊佐雄は妹に告げる。

「うん」唯は小さく答える。

「あのお祖父の顔を見たか？」

伊佐雄はこれまで口にしなかったことを尋ねた。

「うん」と唯。

「あの顔を見てどう思った？」

その祖父の顔というのは、実に壮絶な感じだった。亡くなる直前まで眠りの世界にあったことは確かだったが、いつもどおり、点滴の袋を換えに室内に入った母が、義父の物凄い形相にであって、腰を抜かしたという話を父から聴かされていた伊佐雄だった。祖父はどういったらいいか、まるで絵画のムンクの叫びのように口を大きく縦に開き、こけた頬があまりに凄絶すぎて、目はかっと思開き、天井の一点を見つめているよう。人は亡くなる時、もっとも安らかな顔をするというのはすべてまがいごとで、実は、この祖父の顔がすべてを物語っているように、死というのは凄絶なものであるのだ、と思わせられるような表情だったのだ。いまは顔の筋肉をほぐされて、その表情は見る影もなくなったが、しかし、母の驚きようと云ったら、なかった。

『お義父さんが亡くなってますわ』と母は動？しながら、告げたの

である。

「お祖父が亡くなったか」父の反応はあっけらかんとしたものだっ
た。

丁度、思っていたことが思っていた通りに進行しているのを微笑
ましく思っているような、そんな諦念的な笑顔を見せ、雄大は葬儀
屋と親戚への電話を妻に指示した。

「お祖父ちゃんの顔はこの世の終わりを体現しているみたいだった」
と唯は返答した。「自分達のように、これからの世にも生を残して
いる人とは異なる、ある種の薄暗さがあの表情にはあった気がする」
唯はそう云って、じつと伊佐雄の言葉を待った。

「お祖父はやっぱり、満たされない気持ちのまま亡くなったのかな
？」

伊佐雄は苦しげにそう告げる。

「やっぱり、水がキーワードになるのかな」唯は云う。

「水か」と伊佐雄が云う。「水の中に潜むさまざまな因子を思い返
してみると、祖父の亡くなるまでのこの一ヶ月間はまさしく水に翻
弄された最期だったね」

「なんか切なくなる云い方ね」

唯は声を低める。

「お祖父は諦めていたのか、諦めきれなかったのか。未練を断ち切
ろうとして、未練に取りこまれてしまったような。それには人智を
超えた力が作用していて、俺たちはすべてその不可避の力にさらさ
れているのかもしれない」

「不可避の力？」

「抗うことのできない、有無を云わせぬ力と云ってもいいかもしれ
ない」

「造物主が使いそうな力の？」

「そうとも云い換えられるな」

「ふーん」唯は気乗りがしない様子である。

伊佐雄は妹のその反応に反抗心がむくむくと湧き上がるのを感じていた。

「お祖父ちゃんはそんな力にさらされていたのかな？」

「お祖父だけじゃなくて、いま生を謳歌している俺たちだって、そう云う類の力には常にさらされているんだと思うよ」

「まさか」

「でも、人情の機微つてのは、計算だけではまったく及びもつかないだろう。いつも俺たちは、方向性を見誤る危険にさらされているっていうわけ。つまり、全方位へ飛び散る電磁波の脅威にさらされているみたいなものだね」

「なんだか恐ろしい思想のように聴こえるわ」唯が肩をすくめる。

通夜の席は湿っぽい物になっていた。

涙を流す者もあって、しんみりした雰囲気の中、伊佐雄は表情を曇らせている。

いつもの活発な伊佐雄と唯もその雰囲気被打たれて、何もできない状況だった。

息がつまりそうだ。

伊佐雄はそう考え、この場にいることは何か場違いであるような気さえしてしまって、自分の部屋に引つ込むことにした。お茶を持ってきた母の伊月が「どうしたの？」と彼に訊ね掛ける。「なんでもないよ」とこともなげに告げる息子の言葉に、伊月はなにか感情を揺さぶられたらしく、「またすぐに降りてきなさいね」と声をかける。

彼はそれに返答を加えずに、階段を昇って行った。

源祖父、なんで死んじまったんだよ。

それは唯にも見せない激情だった。

仲の良かった祖父が亡くなって喜ぶ孫などないだろう。伊佐雄もその例に洩れなかった。まだまだ先のことだと思っていた唯には気丈なことを云った伊佐雄も、こうして実際に身近な家族の死を目のあたりにして、平然としてはいられなかった。

伊佐雄は何もする気力が起きず、ベッドに身体を横たえた。

袋小路に陥っているような印象だ。誰もそこから抜け出す方法を知る者はない。自分で迷いを吹き消すしかないのだ。それは十分すぎるほど分かっていたが、それは果して、可能であるのかどうか。平時ならそんな神経衰弱なことには陥らないのに、伊佐雄は祖母が亡くなった時の自身の精神疾患の状況を思い返して、またそのときの感情がぶり返すんじゃないかということに、恐怖を覚えていた。だめだ。こんなネガティブな考え方をしていると、この前の二の舞になるぞ。

心の奥底から、そう云う意識が萌えだしてくる。

お祖父、俺、どうしたらいいんだろう？

二十歳を何年も超えた大人が、祖父に縋ってまで思いつづける感情というのは、外からはまったく想像がつかないだろう。伊佐雄もそんな感情が自分にあるなんてまったく気づかなかった。この祖父が亡くなったという事実をつきつけられたことで、どうしようもなく空しい感情に心を枯らされていくようなそんな印象を覚えた。

しばらくベッドの上でじっとしていると、いつの間にか寝入ってしまった。

コンコンとドアがノックされる音で意識を取り戻す。

「はい」と返事して、置時計をちらつと見ると深夜の一時である。

「入るね」と云う声は唯のものだった。

唯はメイクをまた直したのか、きつちりと化粧が決まっていた。親戚もいるので、滅多なところは見せたくないのだろう。そう云うところが自分の妹ながら、女性と云う意識をしつかりもっている。と云う思いを抱かせる要因になっている。

「お兄ちゃん、寝てた？」と唯は怪訝そうに小首を傾げる。

「ああ」と伊佐雄は返事する。

「とにかく、今日はお祖父ちゃんの通夜なんだから、もう少し自覚を持たないと」

唯は何を話に来たんだろうと、伊佐雄は探るような目つきで妹を

見た。

「お祖父、もう目を覚まさないんだよな」伊佐雄は落胆の表情を見せる。

唯はかっと目を見開いた。「お兄ちゃんでもそう云う表情するんだ？」

「したら悪いか？」

「そんなことないけど、ちょっと意外だった」妹は肩をすくめる。

「だって、いつも毅然としてるし、何か外物の変化ではちっとも自分を崩さないような印象があるんだもの。お兄ちゃんも人並みの人間だったってことかしらね」

伊佐雄は苦笑する。「俺はどれだけ冷血人間なんだよ？」

「そうね」唯はくすくす笑う。「でもほっとした」

「うん？」

「これでちよつとは自分と同じ血が流れてるんだって、意識するこ
とができるもの」

「ふん」

伊佐雄はむすっとした表情を見せながらも、心の裡ではこの妹の言葉に救われたような印象を抱いていた。

「母さんがおにぎり作ってくれたから、食べに降りてきなさいって」唯はそう云うと、先に部屋をあとにした。

伊佐雄は頭をかきながら、もう一度じっくりと置時計を眺めた。

時間の進み行きが早い気がする、と伊佐雄は思う。何か自分だけが時間の流れから取り残されて、浦島太郎になっているような印象を受ける。ぼーっとしていたら、あつという間だという危機感。いまはどんなことがあっても耐えられるけれど、もし、いま祖父くらい年老いていたら、自分は何ができて、何ができないのだろう、と考える。そんなことを考える自分はやっぱり精神が弱っているんだ、と考える伊佐雄だった。

祖父はあの世に行っただろうか、と想像する。

欲しかった水はたらふく飲めただろうか？

そして、最期の審判で天国と地獄、どちらへ行くことになったの
だろう？

祖父のことだから、きつと天国だろうという意識があった。あの
祖父が地獄に落ちなければならぬ理由が見つからない。きつと祖
父は天国でもうまくやっていくだろう。そんな思いを、伊佐雄は新
たにする。

「ああ、いつたい、天国とか、地獄とか、誰が考えたんだよ？」と
伊佐雄は口にする。

なにか、考えるのが馬鹿らしくなってくる。

すべては最初に考えたものの勝利であって、後に生まれたものは、
その考えを粛々と受け入れるしかないような印象を覚える。

天国なんて本当に存在するんだろうか？

伊佐雄はそんな思いを強く持つ。しかし、人口に広く膾炙してい
る考えである、いまあらためてそこに反論の意を持つことは不適切
である気がして、伊佐雄はそれ以上の思考は取りやめる。

階下に降りるか、と伊佐雄は考える。もっといんなことを
考えてみたい誘惑にも駆られるが、折角、呼びに来てくれた妹の行
為を無駄にするわけにもいかない。妹は妹で自身の裡に、どうして
も解けない未解決問題を抱えているようなもので、同じ根の憂鬱を
分け受けているのである。ただ唯一の兄妹なのである。その妹の行
為を無下に扱うことはしてはいけないことだとする思いは常に胸中
に抱いている。

「伊佐雄、遅かったな」と階下へ降りると、清吉叔父さんが声をか
けてきた。

「叔父さん」と伊佐雄は声をあげる。

「そんな気落ちするもんじゃないぞ」清吉は消沈の甥に言葉をかけ
る。「お祖父は大往生だったんだ。きつと未練なんてこの世には無
かったと思うよ」

伊佐雄は祖父が生前、しきりに水を欲しがったことをこの叔父に
ひとことも告げなかった。だからこそ、溜まる不満という物もある

わけ。伊佐雄の心中は、取り留めのない暗黒面が意識されるほどであった。「伊佐雄、お前、何か隠していることでもあるのか？」と清吉叔父が訊ねてくる。

「隠すことなんて何も無いよ」と伊佐雄はとぼける。

「うん、そうだよな。もし何かあったら、俺にいつてくれるだろうしな」

叔父の追及はその言葉で休止符が打たれた。

伊佐雄はテーブルの上に置かれたおにぎりの山に手を伸ばして、そのうちの一つをとる。

一口、二口と齧り、咀嚼していく。

そのとき、丁度折よく、お茶が運ばれてきた。

伊佐雄もひとつ湯呑茶碗をもらって脇に置く。

久しぶりに食べるおにぎりは美味しいと感じられるものだった。

伊佐雄は顔をほころばせる。そこへ唯が脇へ座を占める。

「お兄ちゃん、戻って来たのね」と唯は声を掛けてくれる。

伊佐雄は思いがぐにやりと曲ってしまったような印象を受けた。

父の雄大は親戚と言葉を交わしている。実の弟である清吉とよりも母方の親戚との仲を懸念しているように見えた。伊佐雄は母方のおじおばのことを知ってはいたが、親しく話したことはなかった。そこには加わらず、高みの見物的なものになりさがっていた。

「お祖父さんはなかなか人土であったみたいですね」と祥子叔母さんが口を開くと、雄大はすかさず云った。

「うちのお祖父は、戦争に行つてたくさん人間を殺し、その功績によつて勲章までいただいたわけですが、普段は、そんなことなど意にもかけずにふるまっております。こういうのを真に、人土と云うのかもしれないね」

それは自慢とは異なる、素直に故人の業績を湛える言葉だな、と伊佐雄は思った。

確かに祖父は、一言もその辛い戦争のことを家族に洩らさなかった。

しかし、祖父の功績は或る種の誇りとして、この家に色濃くわだかまっていたのである。祖父にいったいどういう心境の変化があったのか？

六十を超えてから、得た、勲章。それに何の意味があつたのか？ 祖父はそんなことなどに頼着せず、孫たちをいろいろなところへ連れて行ってきて、その純粋な好奇心を刺激してくれたことに、ある種の憧憬を覚える。それはこの家に生まれてよかつたと思える、無常法悦の瞬間であつた。

その祖父がいまは決して動くことのない状態に陥っている。

もう戻つては来ないのだ。

それは虚無の停滞だつた。二度と動かない遺体。意識はどこへ遊離してしまつたのか？

もしかすると、祖父はまだ自分が死んでしまつたことを意識できなくて、未だに水を求めているのかもしれない。

もしかすると、祖父は三途の河の水を飲もうとして、牛頭馬頭に止められているかもしれない。

もしかすると。もしかすると。

そんな思いが胸に込み上げてくる。

祖父はもう戻つてこないのだ。伊佐雄はその意識を新たにする。人が亡くなるという状況は、いつの世でも、とても重要な意味を持つていたんだろう。黄泉の国から連れ戻そうとされた伊邪那美の神の例に洩れず、死からの脱却はどの世でも考えられてきたことなのだろう。どんな人でも、死者を蘇らせられるとわかつたら、どれほどのお金をはたいてでも、そこへ打ち込むだろうことは十分予想の範疇である。

伊佐雄は落ち着いて考える。いったい自分が祖父のために何ができただろう、と。祖父がいま生き返つたなら、どんなことをしてあげられるだろう。しかし、胃に管を通していたあの頃の祖父が意識を取り戻したとしても、多くのことは不可能事として棄却しないといけないだろうとは思ふ。お祖父はいったい何を望んでいたのだら

う？ もう望まれることはすべてやったような気がしていたが、祖父はきつと満足して死んで行ったのであり、あとに残された伊佐雄たちがそれを理解できずに、ただひとり、悶々と悩んでいるだけに過ぎないのかもしれないのだ。

「明日は葬儀ね」と唯が声を掛けてくる。

「俺はお祖母のときと違って、お祖父の遺体が焼かれるとき、泣くかもしれない」

伊佐雄はそんなことを妹に告げる。

唯は顔をほころばせる。「泣きたいなら、泣けばいいわ」

「それはどういう意味で？」

「泣くことはすべての感情をキャンセルすることができる偉大なことなの。私もこれまで何度に、自分のために泣いたか知れない。その経験から思うことなんだけどね」

「なるほど」

伊佐雄は妹の言葉に安楽の感情を覚えた。

七

伊佐雄は再度、二階の自室に戻っていった。

それには唯がついて来たが、「しばらく一人にさせておいてくれ」と云って、伊佐雄は妹を追い出すように外へやった。

彼の心は悲しみの波にさらわれそうになっていた。自分では大丈夫と思っていたが、だんだんその意識は波に洗われて、メッキがはげたようになっていった。

祖父の亡骸を見るのが怖かった。

柔らかい肌に刻印を押しつけられるような恐怖に近い物を感じていた。

だめだ。こんなことを考えていては、きつとみんなの前で泣いてしまう。

伊佐雄はそんなことを考え、そして、自分の意識の拠って来たる所を考える。

涙が流れるかと思っただが、容易には流れない。

何か壁のようなものによって、感情をせき止められているような印象がある。

泣けば気分が楽になり落ち着くのは分かっていたが、それができずに、ただ煩悶するしかない現状を思うと、その状態に陥らせている何かを恨みたくなる気持ちが大きくなる。

行き場のない怒りを感じながら伊佐雄は息を吐く。

人が亡くなるってのは、こんなにも悲しいことだったのか。伊佐雄はそう思い、再びベッドに横になる。

天井を見上げる。四角く直角に梁が交わっている。ベニヤ板が張られ、その木目がつくりものみたいにくつきりを浮き出で見える。木の箱の中で暮らしている自分の存在をちっぽけなものだな、と思うようになっていた。祖父はこれから、遺体を焼かれて、天に召されるんだな、と伊佐雄は思う。そして、その考えが若干間違っ

ることに気づく。祖父の遺体は目の前にあっても、魂の方はもう、すでに天に召されているのである。それはすでに起こったことであるのだ。つまり、その（遺骸≡肉体）と（魂≡精神）はすでに分離して、別々のものになってしまっているということである。

彼はそのことに思いを凝らした。

祖父は本当に天国に召されたのか？

天国とは、後に残されたものが、根拠もなく、勝手に作り上げた理想郷ではないだろうか？そこへ旅立って戻って来た者など、誰もないのだから、勝手なことが人口に膾炙している可能性だってないわけではない。伊佐雄はそんな風に自分の考えの正しさを見極めようと努力してみた。しかし、それだけでは何の判断もつかないわけで、伊佐雄は落胆する気持ちを抑えきれなかった。

死後、魂はどこへ行くんだらう？

同じ時期に亡くなった同志は無数にいるだらう。そんな彼等と一緒に同じところへ向かうとは到底考えられない。そのとき伊佐雄の心には一つの着想が浮かんだ。それは大きな海のような場所にみな集められて、そこへ大波がかぶさってくる。皆はそれにさらわれて海の藻屑のようになって海底に沈みこんでいくというものだった。海底にはこれまでに犠牲になった人物が、ヘドロのようになって積み重なっており、祖父たちもその一部となるために、静かに積もっていくのだとしたら？まるで肉体があるときのように、精神もまた、精神的なプランクトンや精神的なバクテリアによって分解されていき、元の形をとどめられなくなるのではないか。その海は涅槃を体現していて、その涅槃とは泥という意味もあるらしいので、奇妙に符合する。涅槃に入るとはつまりこういうことではないか、と伊佐雄は、少し前の祖母の法事ときに、慈正寺の和尚さんから聞いた話を思い出していた。そのときの話はすっかり忘れていたが、涅槃という言葉は、くつきりと心の奥底に残っていたのだった。

祖父の魂も、祖母の魂も、この世に実在することは決してない、軟泥のようなものに化して存在しつづけて行くということが、

ちよつと素敵なことであるように伊佐雄には思えた。自身がそこにとりこまれ、それ自身になるということが、これほど残された人々にとつて、重要なことになるとは。伊佐雄はひとつの決意を胸に抱いた。涅槃の海に灰を撒くことはできないけれど、現実の海に、そう、あの憧れていた水の豊富な海に祖父の灰をまくことは、ひとつの供養になるのではないかという考え方。そうだ、それがいい。伊佐雄はそう考え、気持ちを上向かせた。

祖父の魂は泥の中で光輝を放ち、伊佐雄たちが亡くなるまで、いや、亡くなつてからもしつかりと見守つてくれるような気がする。大なるものの一部となることによつて、魂自身、より大きなものへ所属することになるのだ。それは個を超えた個であり、一人のものではない、総和としての魂の集結を意味するのだと思う。伊佐雄はそんなことを思いながら、祖父の魂の行き先は現実を一步踏み越えた裏面にあるのだという気持ちを新たにしていた。

しかし、こういう反証も頭の中に浮かび上がってくる。つまり、死者が何人集まつたところで、所詮、知れているという一種の蔑みの感情である。

祖父の魂は確かに天に召されたかもしれない。涅槃の海に沈んで泥となつているかもしれない。しかし、それ以外の方途もあるのではないか。つまり、虚無と同一になつて、肉体的にも精神的にもまつたくの無になつてしまつていくという考え方である。

いずれにせよ、生を得ている今の段階では、祖父の魂がどうなつたかなんて、まったくわからないことである。インドのガンジス川には死体も流されていたと聞く。いまもそうであるのか、そうでないのかはわからない。しかし、ガンジス川の下流域に積もつたヘドロが、インドの人たちに何をもたらしたというのか？ 死後にそのような扱いをされて、怨嗟の声を響かせようと力を発揮したのか、それとも大きな流れの中にとりこまれたことに悠久の安堵を得て、感謝の気持ちでいっぱいになったのか？

それはわからない。わからないけれど、一般的であると信じられ

ていたことなら、それを許容する空気は、住民感情として、そこに存し続けるのではないかと思われる。

「俺はごめんだな」と伊佐雄はつぶやくように云った。「普通に臨終して、普通に葬儀を挙げてもらえればそれでいい」

伊佐雄はそんなことを口にしながら、真に祖父は、こんな最期を望んでいたのだろうか？ と気になった。

初めは、自分と同じように普通の葬儀、普通の供養を望んでいたのではないのか？

とすると、灰を海にまくというようなことは、死者に対する冒？に当たるのではないかとの危惧もある。

祖父はそう云う面では遺言を残さなかったのだ。

故人の遺志を尊重するというのは大切なことだと思う。

それが分からないからと云って、想像でそれを補完することは、はたして正しいことであるのか？ 伊佐雄は父にそのことを、つまり、祖父の灰を海にまくことを提案しようと思っていたが、それが果して正しいことであるのかどうかということについては、頭を悩ませる問題であった。もしかすると、祖父の思いはそんなところにはないのかもしれない。しかし、死後、大切なのは遺族の気持ちの慰撫であって、亡くなった本人よりも、遺族のために開かれるのが、現代日本の葬式というものの本質であるような気がする。祖父はどう思っていたか、ではなく、残された家族がどう思っているか、が重要視される面が少なからずあるもので、伊佐雄はそう云う面から臆せず、父にこのことを進言するのがいいのではないかと考えはじめていた。

祖父の思い。

父の思い。

自分の思い。

唯の思い。

みななはそれぞれ違っているかもしれない。しかし、祖父の身体はひとつしかないのである。それをどう扱うかは、家族で十分

に話し合う必要があるだろう。伊佐雄はそう考えると、何かひとつ頭の中で懸念が氷解したような印象を覚えた。

祖父はどんな思いで日々を過ごしていたのか。

そう考えてみると、祖父の生前、もつと祖父と交流を持っていればよかつたとも思える伊佐雄だった。小さなころは、それこそ祖父にべつたりだつたけれど、高校生になつてからというもの、家族と云う存在に対する考え方が大分、きついものになつてきて、気がつけば、家族の中で孤立しているというようなことがあつた。

祖父はもつと自分との交流を望んでいたのではなかつたか？

そんなことを考えていると、部屋の入口にノックの音がした。

「はい」と伊佐雄が答えると、扉の向こうから、唯の声がした。

「お兄ちゃん、ちよつといいかな」唯は探るような口調で云つた。

その声と同時に扉が開かれた。

さつき別れた時と同じ恰好の唯が見えた。

「あのさ」と云いながら、唯はベッドの、伊佐雄の脇に腰をおろした。「お祖父ちゃんのこともう少し喋らない？」

「どうしたんだ？」と伊佐雄が訊ねる。

「うん、私もひとりであれこれ考えてると、深みにはまつてしまひそうだから、誰かと一緒にいて何か喋つてた方が、気がまぎれると思つてね。でも、親戚の人たちとしゃべるのもちよつとあれだし、お父さんやお母さんは他のことで忙しそうだし。ちよつどいいのが、お兄ちゃんだつたつてわけなのよ」

「なるほどね」伊佐雄は肩をすくめた。

唯は言葉を続けた。「お兄ちゃんは何を考えてたの？」

「何を？ んー、難しいな」伊佐雄は苦笑する。「お祖父のことを考えてたのは唯と一緒にだと思つけど、とりあえず、お祖父の望んだ死のあり方つてどんなものだつたんだらうな、と思つたわけ」

「結論は出たの？」

「いや、お祖父の魂は亡くなつた後、どこへ行つたんだらうと考えるてみてさ。それで、涅槃つてという言葉が頭の中に浮んだんだよな」

「涅槃？」

「涅槃、わかんないか？」伊佐雄はまた肩をすくめた。

「うん、わかんない」唯は言葉を濁した。

「本来の意味は悟りとか仏様の境地を指す言葉なんだけど、前に慈正寺の和尚さんが泥と云う意味もあるって云われてたんだよ。それで、死後、お祖父の灰を海に捲いたらどうかという考え方が頭の中に湧きおこってね。そういうこと考えてると、どうも、亡くなった人の遺骸ってというのは、燃やした方がいいのか、海に流した方がいいのか、それとも海外みたいに、そのまま土に埋めるのがいいのか、どれが最適なんだろうって思うようになってね」

「いろいろ考えてたのね」唯は力なくにつとほほ笑んだ。

「でも、何も解決はしてないんだ。あれこれ考えていたけど」

「涅槃ねえ」

「俺も詳しいことを知ってるわけじゃないんだけどな。でも、こう考えたんだ。死後の魂の寂靜っていうのは、泥のように、静かに水の中に沈殿している状態の、心が平穏なことを言うんじゃないかなってね。だから、お祖父の灰を海にまくことはひとつの供養になるんじゃないか、って思うわけなんだ」

「そうね、そういう考え方もあるわね」唯は声を張って云った。

「この考え方、父さんたちに云ったら、わかってくれるかな？」

唯は思案の表情をした。そして告げる。「わかんないね。どれだけしつかりとその意味を説明できるかっていうのが重要になってくると思うけど、でも、父さんにとって、肉親の灰を海に捲くっていうのは、どう云う思いがするものなのかな？ やっぱりできないって思ったりするものなのかな？」

「んー、わかんないな」と伊佐雄は云った。

「父さんに一度話してみる？ ここで悩んでも、何も進みはしないんだしさ」

「そうだけど、なんだかちよっと怖いな」

「まあ、いまは忙しそうだったから、親戚の人たちが帰ってから説

明しましょうよ。私も助言させてもらうからさ」

「助かるよ」伊佐雄は妹の応援を受けたような印象を覚える。

伊佐雄と唯はそれから無言で、しばらくあちこちを見ていた。話題を無理に探さず、自然な感じでお互いのことをそれほど意識もせず、時間だけが経過して行く。伊佐雄はこの妹のことをよくできた人物だと思っていた。なにか自分に不満がある時でも、きつちりと自分の感情を抑えられる性格だったし、その穏健な性格は、人に好感を与える最たるものでもあったから。

妹は伊佐雄と違って、かなり仲のいい友人を何人も持っていた。伊佐雄には親友と呼べる存在はなかった。それこそ、今回亡くなつた祖父こそ、伊佐雄のことを一番に理解してくれていた人物だったのだが、伊佐雄はそのことも含めて、信頼のおける人物の不在に不貞腐れたような感情も持っているのであった。

「お兄ちゃん」唯が声をかけてくる。

伊佐雄は返事する。「どうした？」

「お祖父ちゃんのこと、本当に悲しいのは悲しいんだけど、家族のうち、一番悲しんでるのはお兄ちゃんじゃないかって思うのよ」

「そうか」伊佐雄は抑揚のない声で答える。

「うん、そんな気がする」唯は食い下がる。

「なら、そうかもしれないな」

「なんだか、よそごとみたいな云い方ね」

「そうか？」伊佐雄は怪訝そうに声をあげる。

「また、？そうか？だ」唯は肩をすくめる。

「だって仕方ないだろう。自分で自分の姿を見ることはできないってやつでさ」

「そうかもしれないけど」唯は声をあらげる。

二人はいがみあいながらも、自分の言い分をしっかりと持って、互いを許容する思いを胸に抱く。

伊佐雄は頭の中を整理してみた。この世に残される遺族の悲しみという奴に打ちのめされそうである。みんな、こんな感情を乗り越

えて、毎日の生活を送っているんだろうか、と伊佐雄は職場の面々の顔をひとりひとり思い返していた。その中にはそんな悲しみとは無縁と思えるような人物の顔もあったのだが、すっかり考えてみると、それは悲しみを乗り越えたすっかりとした表情であると察知されるような類のものであったのだ。

「父さん母さんが亡くなったら、悲しみはもつと直截的なものになるのかな？」

伊佐雄はしみじみと云う。

「突然何を云い出すのよ。父さん母さんのことなんて、まだまだ先のことじゃないの」

唯はむきになって云う。

「でも、いずれは亡くなるわけだよ。おそらくは、俺たちよりも先にね」

「そうかもしれないけど」と唯は声を低める。「でも、そんなことは考えないことよ。でないと、悲しくなるじゃない」

「そうだな」伊佐雄は妹にそんな話をしたことを悔やんだ。

気持ちが感傷的な方向に流れつつあるのを感じていた。いったい俺は妹をどうしたいと思っているのか。そんな風に言葉で悲しませるためにここにいさせているわけではないのだ。もつと建設的な会話、そう、祖父の遺骨をどうするのが最適か、とか、そういうことに意見を求めることこそ、この場合の？建設的？なことだと思いはじめていた。

祖父のことをもう一度、考える。

祖父の魂はいまどのあたりにいるのだろうか？

天国？ 地獄？ 冥府？

冥府なら、あの閻魔の審判を受けているのだろうか？ 生前、すっかりとした行いをしていた祖父が地獄行きを申しつけられることはないだろうと、そんなことを思い返す。祖父はどこか超越的な意思を持っているようなそんな印象を伊佐雄は身裡の鼻眞目で思っていた。祖父はすっかりとした人格者であったから、地獄に落ちる筈

がない、そんなことを思いながら、またそれを自明のことであるように、得々と観じている自分の思いに反感すら覚えているのだった。

一番、理解しやすい天国と地獄という概念は、この世に残されたものにとつて、もっとも飛びつきやすい、簡単な理論で通底している考え方である。ひとつの強固な考えを受け入れる時、人は、どうしても、自分の中の感情を思考停止させるために、より大きな概念の需要を希望することがある。この場合がそれだと考えられた。

祖父の思いというものを最も強く甘受すべき存在であった伊佐雄が、功利的な思いで、祖父の死を受け入れているのだとすれば、伊佐雄はこの場合、祖父に対して、もっとも不実な存在であったというしかないのかもしれない。

祖父は死に際する時、伊佐雄こそ、自身の思いの具現者であると思っていたかもしれないのだ、なのに、それを通り越して、自分がともその役目に不適であることを思いつつ、すべての責任を放棄したところに伊佐雄の限界があつたのかもしれない。

「唯」と伊佐雄は声をあげる。

「どうしたの？」と唯は怪訝そうに尋ねる。

「いや、ちよつとね」

伊佐雄はそのとき、怖ろしい思いを抱いていたのだった。

つまり、天国とか、地獄とか、冥府というのは、やはりこの地上に生きる人間が便宜上定めたものであり、実際には存在していないのではないかという着想だった。伊佐雄にとつて、冥府というものは、地上に残されているものにとつて、もっとも安逸に信じられる考え方であつて、それが全体に敷衍されているとは、とても云えない代物に思われてくるのだった。

つまり、祖父は冥府に連れられたのではなく、いまもまだ無間地獄とでもいうべき、虚無の支配するすべてが存在を虚しくする存在の中にとりこまれて、身動きできなくなっているのではあるまいか、とする考え方が伊佐雄の頭の中で優勢になっていた。

「唯、俺はどうしても死後の世界というものが信じられないんだ」

伊佐雄はそんなことを口走る。

「いったいどうしたの？」と唯は怪訝そうに訊ねる。

「だめなんだ」

「何が？」

「お祖父は虚無世界に引きずられていった。そう思えてならない」

「んー、そうなのかな」と唯は兄の言葉を押しとどめた。

「なにか危害を加えるとか、裁断するとか、そういうのとは異なるわけでしょ。お祖父の魂がどこにいったにせよ、その精神は尊重されてると思うわ」

「そうなのかな」と伊佐雄は疑っているような口ぶりで、妹に告げる。

「大丈夫よ、お兄ちゃん。心配はいらない」

唯はそう云って、励まそうとする。

「そうかな。そうだよな。うん、きつとそうだ」そう云いながらも、伊佐雄の表情の晴れることはなかった。

「お祖父のこと、もっと信頼しないと」と唯は云う。

「そうだよな」

伊佐雄はチェストの上に建ててある家族写真をじつと見つめた。

そこには家族全員で撮ったスナップ写真が収められていた。

「懐かしいな。海水浴のときのだよ」と伊佐雄は云う。

「うん、あの頃は楽しかったね」と唯もそのときのことを思い出しているのか、顔に満面の笑みを浮かべている。「お兄ちゃん、ほんと、水着の女の人ばかりみてたよね」唯は減らず口を叩く。

「うっさい」

伊佐雄は苦笑する。

しばらく伊佐雄と唯の哄笑がつづき、それから、「うん、最初で最後の思い出だったね」と云う唯の言葉に、場はしんみりとした。

そして夜は更けてゆく。

「お祖父の魂は涅槃に入ったか、ってなんか小坊主の無理難題みたいな気がするわ」

唯が辛辣な言葉を口にした。

「そもそも涅槃に入るということ自体、残された人間が便宜的に使った云い訳なんじゃないかな？」

「そういう考え方もできるよね」

「うん、なんだか俺はお祖父の今回の亡くなり方は、ちょっと特殊だったんじゃないかって思うようになってるんだ」

「特殊？」と唯。

「ああ、あの水を欲しいと云って亡くなった祖母の臨終と好対照を為していて、それは一種の横暴に近いものであったかも知れないけど、でも、残された俺たちにとっても、祖父の最期はいろいろと考えさせられるものであったには違いないんだからね」

「確かにそうかもしれないけど、でも……」

「でも？」伊佐雄が疑問符をつけて訊ねた。

「でも、お祖父はお祖母と同じように、水が欲しいって云って、亡くなつたんだよ。どこが好対照なわけ？」

「わからないか？」

「うん、わかんない」

「駄目だなあ、それくらいわからないと」

「そんな」と唯は肩をすくめる。

「お祖父とお祖母が違いは、心の奥にあった水を希求する気持ちの相違なんだよ」

唯は伊佐雄の言葉をしっかりと聞いていた。

「相違？」

「ああ、その相違があつたからこそ、同じ水を求めるにしても、その精神には真逆と云つても良いほどの違いが現出していたと見るべ

きだね」

「なかなか難しそうな意見ね」と唯は答える。

「あのお祖父の言葉覚えてるか？」

「なに？」

「『水をくれないか』という単純な言葉は、飢渴し、懇願する者の言葉とは違いがはつきりしていた。お祖父はあのと看、頭の中にお祖母のことを念頭に置いていたんじゃないかと思うんだ。看病する側が思っている以上に、過去のことをしっかりと行って、行動するとでもいうような」

「それは推測？」唯は怪訝そうな視線を兄に向けた。

「推測というか、確信だよ」

「でも、それは間違いを包含しているかもしれない」

「その可能性は十分あるけどね」

「そうよね」

会話はそれから少しときれがちになった。

唯は部屋の中をぐるりと見回す。

「お兄ちゃんの部屋に入るの久しぶりだけど、いろいろあるね」

伊佐雄は本棚に目をやった。

「ここしばらく、本を集めてたから、本棚は充実してるよ。結構揃ってるだろう？」

「そうね」唯は本棚に目を滑らす。「本って読んでて楽しい？」突然、唯が訊ねてくる。

「ああ、楽しいよ」と伊佐雄は云う。

「自分の世界が広がるような気がして、読む前と読む後じゃ、世界の見え方が変わるっていうか。とにかく、自分の視野を広げてくれる作用を持つ小説こそ、その最たるものって気がするけどね」

「なんか難しそう」唯は普段、あまり本を読まない部類の人物だった。「お兄ちゃんは昔から難しい本でも難なく読んでたよね。私は駄目だわ、そういうの。いったいお祖父がどんなことを考えてたのか？ それを考えることはやぶさかではないけど、結局、自分の中

に確たるものがないから、すべてを想像で補わないといけない。想像はときに事実を歪曲するもの。これではいけないとは思っただけど」

「俺だって、想像に拠っている部分は多いよ」と伊佐雄は妹に譲歩する。

「でも、しつかりとした信念に基づいた意見って気がするわ。お兄ちゃんの言葉はね」

「買いかぶり過ぎさ」

「そうなのかなあ」唯は怪訝そうに表情を曇らせていた。

「父さんにとつては最後の親の死去だったわけだし、もつと落ち込むかと思つてたけど、そんなこともなさそうでちよつと安心したよ」
「そうね」

「そうだ、ここにある本、何か貸してやるよ。よかつたら、持つて行つていいよ」伊佐雄は珍しく妹に本を貸す気になった。

唯は困惑した表情で兄を見ている。どことなくそわそわして落ち着きがないように見える。「お兄ちゃんがそんなこと云つてくれるつて、なかなかないことね」

「そうか？ そういえば、そうかもしれないな」伊佐雄は傍らの唯を見ながら、目を細めた。

唯は椅子から腰をあげると、本棚の方へ寄つた。「お兄ちゃんが持つてる本って私には難しい物が多いのよね」唯はそう呟きながら、じつと兄の本棚に視線を注いでいる。「んー、この中から見つけるなんて、私には難しいわ」

「唯の読みたい本ってどんなのだい？」

「私が本に求めているのは、ロマンかなあ、大正ロマンとかなんか憧れる気持ちがあつて」

「上流階級の生活を描写しているようなものが良いってことかな？」

唯はしばらく考えていた。「そうなるかな」

「なら、谷崎潤一郎の『細雪』なんかどうだろう」

「なにそれ、面白いの？」

「希望には添える内容だと思う。関西弁でも上流の雰囲気のある関西弁で、文章は流れるように軟らかいし、ちよつと昔のことを描いているというのもいいだろう？ ほら、これだよ」そう云うと、もう本棚に寄っていた伊佐雄は、棚から新潮文庫版を取り出した。

「三冊あるから、じっくり取り組むといいよ」
「ありがと」

伊佐雄は肩をすくめて、ほほ笑んだ。

「じゃ、私もお返しにCD貸すよ。あとで私の部屋に来てくれる？」
「ああ、わかった」と伊佐雄は返答する。

伊佐雄は本はよく読むが、音楽はたまにラジオを聴くくらいで、自分からCDを買ったりするような能動的な行動はとらないのが常だった。

「お兄ちゃんつて、あんまり音楽聴いてるイメージないんだけど、どんなアーティストが好きなの？」唯は罪のない質問をしてくる。

伊佐雄はそんな質問をされても、答えを持たなかった。

しばらく考えて、こう答える。

「わかんないよ」

「わかんない？」

「選択肢が　いまどんなアーティストが売れているのか、誰がどんな歌を歌ってるか、まったくわかんないしね」

「困ったわね」と唯は云った。「なら、私がセレクトしたげるから、それでも聴いてみて。お薦めしたい曲はいっぱいあるからね！」

伊佐雄はほつと胸を撫でおろした。

「助かるよ」と彼は云う。

「でも、同じ兄妹なのに、趣味や趣向がまったく違うって、考えてみると、不思議なものね」

「どちらかがどちらかの劣化コピーだったりしたら、それこそ、気持悪いと思うぞ」

「そうだけど、やっぱり兄妹なんだから似てるところないかなあ、って思うことは自然だと思うんだけど」

「そうだな」伊佐雄は肩をすくめる。「それにしても」

「うん？」

「お祖父のことしばらく夢に見そうだよ」

「そうね」

「だって、あの雨水をぴちやぴちやと身体に掛けていた時の、お祖父の満足そうな顔を見ると、どこか壮絶なこの世の終わりを見ているような気がして、それっていわゆる終末の風景だったんじゃないかって思えてくるんだよ」

伊佐雄はその時のことを思い出しながら、妹に告げた。

祖父の源一は伊佐雄が中学の時、倚天の滝に連れて行ってくれた。あの時のアグレッシブな祖父はもうどこにもいないのだと思うと、悲しくなってくるが、あの祖父は、あの滝を見て、どんなことを考えていたんだろう。祖父自身は、あの滝を見たときでも、すごいとか、驚いたとか、そう云う言葉を一度も発さなかった。祖父にとって滝とは、それほど感動をそそるものではなかったのだろうか？ いや、そう云う訳ではないだろう。祖父も感動していたに違いないのだ。その証拠に、祖父は何度も滝の、水がこぼれ落ち始める際を見て、それから視線を滑らせて、滝壺に落ち込んでいく水の塊を見、また上部へと視線を移すというやり方で、何度も何度も、その滝の姿を目に焼き付けているようだった。

あの頃から、祖父の心の中には水の世界というものが出来ていたのではないか？

伊佐雄はそう考える。

普段青色だと思っていた水だけど、あの滝壺に落ち込むときの繁吹は、雲の白に負けないほど真っ白で、伊佐雄は、この白さは、水が秘めている資性のひとつという気がしていた。

資性。それは、神が万物に与えた祝福の素質。

「お祖父と一緒に岐阜県に滝を見に行ったことがあったんだ」伊佐雄は唐突に切り出した。

「うん、知ってる」と唯は答える。

「あのおときのお祖父の嬉しそうな笑顔は他にまったく比較することができないもののないほど、純粹なものだった。それは滝を見られたことの喜びじゃなくて、孫である俺と一緒にどこかへ出かけて、一緒にものを見るということに充実した時間を過ごせたと思う喜びの気持ちが大きかったんだと思うんだ」

「うん」唯は小さくうなずく。

お祖父のことを思い出しながら、伊佐雄はゆっくりと言葉を織っていく。

「俺もいつかお祖父みたいに年老いた時、孫と一緒に、どこかへ出かけたりのような活動的な人間でいられるかな」

不意に見せる兄の弱気な心に唯は喝を入れようとしたのか、こんなことを告げる。

「大丈夫よ。気さえ強く持てば、大抵のことはできるんだから」

「そうだな」伊佐雄はにつとほほ笑んだ。

伊佐雄はそんなことを云いながら、頭では別のことを考えつつあった。

それはこう云うことである。

死後、人は弔われて仏となり、死出の道に向かう。三途の川があり、閻魔の府へやられるに違いない。そこで生前の行動が逐一吟味され、天国行きか、地獄行きかが決定して、しかるべき場所へと追いやられる。それが一般的な日本の仏教観であるが、本当にそれは正しいのか？ 便宜上付加された余計なものも多くあるのではないかと考えていくと、ひとつのことに凝り固まって、周りが見えなくなる弊害が立ち現れてくるような気がして、どうにも落ち着かない。もし仮りに、真に仏とはいわないまでも、声聞・縁覚になれるほどに貴い事績を残した人物があったとしたら、その人物はどこへ住まうことになるのだろうか。それに、仏教には輪廻という考え方があから、天国行きが決まったとしても、そこで功德を使い果たしてしまえば、また人間界や修羅界、畜生界などに墮ちることもあり得るのである。天国行きと云っても、永久的なものではないことは確

かである。すると、この世に安住の地などないのであって、迷いの炎を打ち消す涅槃ニルヴァーナを体現しなければ、永久に同じところを回ることになりかねないのではないか？

そんなことを伊佐雄は思っていた。

「なあ、唯」

伊佐雄は今では『細雪』の冒頭のページをちらちらと眺めている妹に声を掛けた。

「死後の世界って信じるか？」

「突然、何？ どうしたの？」

「だから、死後の世界って信じるか？」

「オカルトじみた話は苦手だけど、とにかく、死後にも別の世界が広がってるっていう思想に関しては、私も、信じてるけど」

「そうだよな。日本人は大抵、三途の河とか、閻魔王のこととかは信じてるよな」

「それって日本だけなの？」

「いやいや、それは仏教信仰が盛んな国では主要な思想であるし、キリスト教圏でも、別の概念によって死後の世界は約束されていることになってたはずだ」

「はず？」

「ああ、詳しいことは俺も知らないからね」

「そう」

「でも、いったい誰が最初に天国だ、地獄だ、冥府だと云いはじめたんだか」

「そりゃ、仏教の興る前から人々の口をついて伝承されていたんじゃない？」

「まあ、そうなんだろうけど、でも、いったい、誰が何の目的で、天国地獄を作ったんだか。それに、六道輪廻とか、涅槃寂静とか、因果応報とか、考えてみると、人智では測れないものが仏教には多すぎる。しかも、それは一部、一般常識として、民間に信じられているということ自体、信じられないことだよ。この科学全盛の時代

「にね」

「そうね。なかなかおかしな事態よね」

「ああ」伊佐雄は目を細めた。「俺はみんなが無批判にそう云った意見を採用してしまうところに、人の危うさがあるような気がしてしまっただろ。だってそうだろう。十分に吟味されないまま習得された知識ってものは、いろいろな判断を迫られる現実世界にあつては間違つた方向へと人を導いてしまいかねない、とてつもない、悪い概念であるような気さえしてくるんだ」

「なるほど。そう云う考え方もあるね」唯は肩をすくめて見せた。

「ところで、唯は、普段、なにか悩み事とかないか？」

「突然どうしたの？」

「いや、もしよかつたら、訊かせてほしいなと思ってね」

「悩みか」

唯はしばらく思案するように天井を見上げた。

眼をきよるきよると動かし、何か考えている素振りを見せたが、実は、何も考えていないのかもしれない。ただ考えるふりをして、この場をごまかそうとしているのかもしれない、伊佐雄には思えたのだが、やがて、彼女はひとつのことを語り出した。

「あのね」と唯は切り出す。「お祖父ちゃんとお祖母ちゃんの死は、水に関することで共通して、何らかの感慨を、遺された人に与えていたよね」

「そうだな」

伊佐雄は話の方向性が見えなかったが、黙って聴いた。

「あの水という奴、考えてみると、不思議よね」

「また水か」伊佐雄はやれやれと首を振る。

「また、じゃないの。これこそ、大切なことだわ」

伊佐雄は黙って話を聞き続ける。

「水ってというのは、人の身体の大半を占める重要な構成要素よね」
「そうだな」

「その水を欲しいって告げる時、お祖父ちゃん、お祖母ちゃんの身

体は、本当に水を欲していたのかな、って思うわけ」

「欲しいから、欲しいっていったんじゃないの？」

「私達は若いからそんなことはないけど、年配の人にとって、水っていうのはとっても尊いものだったんじゃないかって、思うのよ」「なるほど」

「その尊い水の中でも、雨水っていうのは、所謂天から降ってくるもので、見ようによつては、とても神聖なものという受け取り方ができるよね？」

「まあ、そうかも知れない」

「その水を欲しいと懇願したお祖母ちゃん。その水を身体に塗ったお祖父ちゃん。二人は雨水を神聖視してたんだと思うんだけど、この考え方、どこがおかしいかな？」

伊佐雄は妹の話を吟味するように、最初から、反芻した。視線を唯の方に向けながら、正確には付きあたりの壁を見ているような感じ。伊佐雄はじっくりとその内容を吟味した。

「おかしいところはないと思う」

それが伊佐雄の出した結論だった。

「お祖父ちゃんのこと、忘れるときが来るのかな？」

唯は心配そうに告げる。

「大丈夫だよ、お祖父はいつも俺たちを見守ってくれてるはずさ」

「そうね、そうよね」

「それより、明日は葬儀だな」

「うん」唯は表情を曇らせた。

「どうした？」と伊佐雄は訊ねる。

「うん」

「なんだ、煮え切らないな」伊佐雄は溜息をつく。

二人の間には沈黙が流れた。どちらからともなく言葉を発しにくい雰囲気。滲みだして、会話はしばらく杜絶した。

伊佐雄は落ちつかなげに妹の方を見て、それからすぐに視線を部屋の向こうの方へやった。あまり見ていると、不審に思われるかも

しれないと感じてのことだった。

やがて、「ねえ」と唯の方から口を開く。

「だから、どうしたんだ？」と伊佐雄は云った。

「明日天気予報、雨なんだって」

「うん、それで」と伊佐雄は肩の緊張を抜いた。

「なんか人知を超えたものを感じない？」

「そんなこと、雨の日ってのは、たいてい、晴れ、曇り、雨の三つしかないんだから、偶然ってこともあり得るだろう？」

「それにしても、なかなかとってつけたような雨予報なんだけど」

「考え過ぎさ」伊佐雄は取り合わない。

「そうかなあ」唯は兄の気乗りの無さに落胆の表情を隠せない。「とにかく、明日は雨なんだって。盥を外に出して、集めた雨水を仏前に供えるのもいいかもね」

「お祖母のときみたいに？」

「そうそう」唯は嬉しそうにそう云った。その喜びの表情は、祖父の亡くなった悲しみを吹き飛ばそうとするような、努めて、その辛さを忘れようとするような感情に裏打ちされている気がして、伊佐雄は、あまり強く、この妹を反対することができなかつた。

「お祖父も喜んでるだろうよ」

「そう？」

「ああ、孫がこうして、お祖父のことを思って、あれこれやろうとしてるんだ。それで喜ばない祖父はいないと思うよ」

「そうよね」唯はその言葉に励まされて、喜悅の表情をしてみせた。

やがて、唯は『細雪』を持って、部屋を出て行った。

九

葬儀は決められたしきたりに沿って、円滑に進められた。

途中、父ががっくりとうなだれて、涙を我慢しているような姿が印象的だった。しかし、それはそう見えただけにすぎないのであり、父が本当に涙を流しかねないような心境であったかどうかは定かでない。

「元気を出さんといかんよ」清叔父さんが伊佐雄たちに告げる。

「はい」と端然と答える伊佐雄。

しかしその心中は、やはり亡くなった祖父への思慕に覆われていた。

慈正寺の和尚さんが来られて、読経をされる。

声は朗々とひびいて、通夜の席から漂っていた重い空気を打ち破る一個の澄明を体現している。耳に心地良い声だ。これは、亡くなった祖父でなくても、思わず聴き入ってしまいそうである。

「ありがとうございます」

喪主である父が、読経を終えた和尚さんに告げる。

「いえいえ、私はやるべきことを為しただけですから」と和尚さんは答える。

「いえ、とても感謝しております」傍らの母もそう告げる。

「源一さんは信心深い方で、よく集まりにも顔を出してくださいました」和尚さんが思い出話をする。「源一さんのような方が亡くなられてしまうのは、残念で仕方ありません。善い人ほど早く亡くなることは、ことわざとおりですね。私のような凡骨がながながと生き恥をさらしております。いや、申し訳ない、いらぬことを申しました。お忘れください」

伊佐雄は謙遜する慈正寺の和尚さんに好意を持っていた。

それは今回のことだというよりも、常に心に抱いていて、その思いを一層強めたという感覚であった。

「和尚さん、祖父は成仏できるでしょうか？」

父がそんなことを訊ねる。

「なかなか難しいですな」と和尚さんは云う。

その正直さが誠実さを表していて、この人こそ尊敬に値する、と伊佐雄は思う。

確かに、残された者に対して、ホトケは成仏なされることであろうと云って、気持ちを慰撫することは簡単だろう。しかし、その嘘はとても罪深い物であり、仏教では不妄語と云っていましめられる戒律のひとつであるということ、前に和尚さんが自身を制するのにつかっていたことを伊佐雄は思い出した。

亡くなつたばかりの者の葬儀において、成仏できないかもしれない、と示すのは、慣例からいくと確かに褒められたものではないかもしれない。しかし、それは慈正寺の和尚さんの真面目さを示す好例であり、それがこの和尚さんの人柄を決定する重要な要素になっている気がした。

「では棺を運んでいただけますか？」

脇から葬儀屋の声がかかった。

「ならば、私はこれにて」と和尚さんは眼をしょぼしょぼさせながら、縁側で草履をはいて葬儀の席をあとにした。

伊佐雄はもつとこの和尚さんの話を聞きたかった。

しかし、いまはどうすることもできない。

伊佐雄は、祖父の棺を運ぶ人員として駆り出された。

そして、棺は家の前に停められた霊柩車の中へ運ばれる。

祖母のときはそれほど実感がなかったが、いまは違う。

もう祖父は火葬場で焼かれるしかないのだ、と思うと、枯れていた涙が再び湧出しそうであった。

父は霊柩車に乗りこみ他はマイクロバスで、火葬場に向けて出発する。途中何度か信号に引っ掛かりながら、伊佐雄は自分がいま乗っているバスのことを考え、なにか沈鬱な気分を苛まれるのを、特殊な気持ちで受け入れていた。

「お祖父は幸せだったのかな」伊佐雄は言葉を口にする。

「幸せだったわよ」と唯が答える。

母はそれには一言も答えなかった。明確な答えを持っていなかったか、まったくことなるネガティブな思考に傾いていたか、それはわからない。ただ、慰めてくれていた唯の存在を伊佐雄はとてもありがたいと感じていた。

バスに乗っている親族は一言も発さない。

これで祖父とも永久にお別れになるのだと思うと、伊佐雄は遣る瀬ない気持ちになった。いったいどうすればこの窮境から逃れることができるのか。祖父の思いは無事昇華されたとは思えない。まだこの世に未練があったのではないか。しかし、そんなことを思ってもいまではどうしようもないのである。残った人の思念というものは、恨みの塊となって生きる人の心に影響を及ぼすものであるのか、そうではないのか？

唯の向こうに座っている母の姿を見る。

言葉を持たず、じっと押し黙っている。

バスの中はひんやりしていた。

きつと冷房が掛かっているんだろう。

しかし空気は重くて、どこか皮膚を圧迫して来るような気配があった。それは死者の遺体の後をついて走っているという事実からくる強迫観念なのか、理性的なる現実感覚として存在しているものであるのか、確かめるすべはないけれど、そのどちらもが、この車内の空間を占めている気がして、落ち着かなかった。

いまでは皮膚がぴりぴりしていた。

何度か額にかゆみを覚えて、指でその箇所を？いたりした。

「お祖父とお別れか……」と伊佐雄がぼそつと告げると、唯はびくつきとして顔を彼の方に向けた。そして、母も同じようにこちらを見ている。

母の顔が常にならないほど、心配そうにこちらを見ているのに気づく。「どうしたの、母さん？」と伊佐雄が訊ねると、

「お別れとか、そういうこと云わないで」と母は懇願するように告げる。

「別れても、私たちの心の中に、お祖父は生きつづけるよ」
唯が感傷的なことを云った。

「死者つてものはそれだけ見たら、俺たちと別れなければいけない存在だけど、人には心があるもの。心さえしっかり持っていけば、時間を超えて、過去の人と語りあうことが可能になるじゃないかしら？ それさえ忘れなければ、きつと実りある人生を送ることができるとは？」

母はしっかりとした意識をもって、それらの言葉を口に出している気がした。

伊佐雄はふつと肩の力を抜く。

「そうか、そうだよ」唯が声を上げる。「私たちがお祖父のことを忘れなかつたら、お祖父は永遠に私たちの心の中で生きつづけるんだよね」

唯もそれまでずっと悩んで落ち込んでいたのだろう。母の言葉を受けて元気を取り戻したようだった。

「うん、そうよね」唯が云った。

そのとき、運転手が初めて口を開いた。

「いいご家族ですね」

それはたった一言だったが、場を和ませる格好の言葉となった。

「そうですか？」と母が訊ねる。

「さつきから話を伺ってましたが、しっかりと結束されている仲のいい家族という気が致します」運転手はお世辞ではないしっかりとした語調で告げる。

「ありがとうございます」と母が答える。

そのやりとりに、伊佐雄も気をよくした。

道は山路へと変わっていった。

火葬場はこの山の頂上にあった。

祖母のときと同じ火葬場だ。死ねば人は魂が遊離して、肉体は打

ち棄てられる。その肉体をもつとも効率よく処分するには、荼毘に付すのが一番である。

「母さん」と伊佐雄が恐る恐る言葉を発した。

「どうしたの？」と母は訊ねる。

「お祖父の灰を海に撒きたいと思うんだ。だめかな？」

伊佐雄は反対されるかもしれないと恐れながら、そういう提案を試みた。

母はしばらく押し黙っていた。しつかりといま息子に云われたことを吟味している様子だった。

「母さん、どうかな」伊佐雄は云い継る。

「それは伊佐雄の考え？」母の思いは言葉の雰囲気からは察知できなかった。

「俺の意見だけど、これには唯の思いも含まれてるよ」

「そう、二人の意見なのね」と母。

母はしばらく黙っていたがバスが火葬場につく直前に云った。「伊佐雄たちのしたいようにすればいいわ。それがお祖父を思っていることだったら、何も云わない。海にどういう意味が籠められているのかわからないけど、それが最良だと思うのなら、そうすればいい。溺愛していた孫二人の意見なんだもの。よもや、お祖父も怒って夢に出てくることもないでしょうし」

「ありがとう」と伊佐雄は自分のことのように喜んだ。

母が同意してくれるとは思えなかったから、ずっと不安で仕方なかったのだった。しかし、こうして、母の同意を取りつけてみると、祖父の遺灰を海に撒きたいと云った申し出自体が、なにか死者の冒？値するのではないかとの恐怖も心に萌したのだった。

自分たちの責任でやれ、と云う言葉は、確かに子に対する信頼の証ではあったが、すべての責任は自分に存しているという気がして、重い役目を負ってしまった者が感じるように、心を冷たく凍えさせるような、重圧が感じられて来た。

霊柩車が止まると、そのあとに伊佐雄たちを乗せたマイクロバス

が停車した。

バスからずらずらと親戚が降りる。中にはまるで遠足に来たみたいに晴れやかな顔をしている者もあった。伊佐雄はそのような顔に出会つと反感を抱きそうになったが、しかし、それもまたその人なりの供養の仕方なのかもしれない、と思ひ直し、機嫌を取り戻した。棺が運ばれ、あとはボタンを押すだけになった。

父が代表してそのボタンを押すことになった。

父は手が震えていた。しばらくの逡巡のあと、勢いをつけてボタンを押す。棺が炉の方へ近づいていく。父は、それ以上見るのが忍びないのか、もうそこから離れていた。

「では三時には終わっていますので、そのときにまたお願いします」と告げられ、解散になった。

送迎バスで家の前まで送られる。

伊佐雄の父と母は明らかに言葉数が少なかった。清叔父さんが二言三言声をかけたが、まったく受け答えをしなかった。伊佐雄は清叔父さんに、父母をしばらくそつとしておいてください、と云った。清叔父さんは「そうか」と云って、大人しく戻る。

時間まで親戚はみな、食事をとってもらつことになった。

伊佐雄と唯も、日本料理の店に予約を取っているからと云われ、同行することになった。

店では普段食べないような御馳走が出されたが、あまり味がわからなかった。悲しみというか、喪失感が、味覚全般に影響を与えて、なにかふわふわしたような印象に包まれていたのである。

お祖父のことをこれ以上引きずつても仕方ない、と伊佐雄は思う。

しかし、どうすれば自分の思いが上向きに変転するのか、それが分からなかった。

伊佐雄はビールにも手を伸ばした。一人で大瓶二本まるまる空けてしまった。

「お兄ちゃん、飲み過ぎじゃない？」と唯が心配する。

伊佐雄は酒にそれほど強くなかった。それでも、今日は飲みたい気分だと威勢をあげて、限度を超えて飲んでいた。頭はぐらぐらしていたが、飲んでも飲んでも、悲しみは払拭できない。それでまたグラスを干すという具合だった。

足腰が立たなくなるといっほどではなかったが、帰りの送迎バスではひとり寝込んでしまった。

起きると、家だった。

しかもバスから降りた記憶もなく、起きあがると頭ががんがんにいる。頬も火照っている。

「そんなに飲んで」と側にいるのにひどく遠くに聞こえる母の声。うるさい小言。

「まあ、仕方ないさ、お祖父が亡くなって、伊佐雄も常にはない精神状態なんだろう。だって、お前、伊佐雄が酔っているところなんて、これまでに見たことがあったか？ なかったらどう？ 今日くらはいは大目に見てやってもいいんじゃないかな」

父の雄大はそう告げ、伊佐雄の味方をした。

「そうですか、んー」というのは伊月だった。

「さあ、そろそろ時間じゃないか？」と雄大が云う。

「そうですね」

「伊佐雄、唯、いくぞ」と父は告げた。

伊佐雄はまだ頭ががんがんにしていたが、それでも意識はあり、これからお祖父の遺灰をとりに行かなければならないのだ、と云うことを頭の中で理解していた。

唯はふらふらする兄の足許にびくびくしながら、マイクロバスに乗り込んだ。

「出発します」と運転手が告げる。

人数を数え、全員乗っていることを確認してから、「お願いします」と告げた。

マイクロバスは火葬場目指して出発した。途中何度か信号に引っ掛かりながらも、出棺時刻を過ぎる前に、火葬場に到着することが

できた一行は、そのまま全員で固まって、場内へ入場した。

やや早く来すぎたようで、まだ棺は炉から出されていなかった。あと五分ほどです、と時間に厳格そうな職員が父に告げた。父は「お願いします」とだけ告げて、五分と云う、体感的にはとても長い進み行きの時間を待った。

そして、オートメーション化されているのか、誰も操作していないのに、時間が来ると棺が炉から出て来た。棺だったものが冷まされ、職員が広くなっているところへ棺を引き出す。「熱くなつてますのでお気を付けください」と云い、棺がこちらへ運ばれて来ると、灰白色をした、とがった骨がいくつも見えていた。

まったく水気の無い、荒寥とした原野を思わせる光景だった。

これが祖父だったものなのか、と意識する。とてもではないけど、生の残骸であつたものとも思えず、いくら見ても、これが祖父だつたと思ふことはできなかった。祖母の葬儀のときは、まだ幼いからという理由で、親戚の家に預けられて、伊佐雄と唯は、こういつた遺骨の光景を見たことはなかった。それが実は、こんなに無惨なものであるとは想像もしなかった。骨はたしかに白いが、青空に浮かぶ雲のような白さではなく、年寄りのランクイバのような白さでも言つのだらうか、少し黄身がかったような印象の漂う白さでも形容すべきところである。そこに、灰が、直接手で擦りつけたかのように、骨に付着しているので、汚れたものという印象がとても強い。とてもではないけれど、清らかとか、静穏とかいった雰囲気とは異なるものが、この遺骨の周りを取り巻いている気がした。

「では、お骨をこちらへ入れて頂けますか？」と職員が告げる。

それは骨壺と云うものだと、伊佐雄は知識で知っていた。

一人ひとり親・親戚が坪の中へ小さな白い破片を入れて行く。言葉が漏らすものはなかった。ただ皆、一様に、神妙な面持ちをしながら、この儀式の終わるのを待っていた。

「あの……」とその時、唯が声をあげた。

伊佐雄が少しふらふらして意識を明敏に出来ていないから、代わ

りに告げた。「遺灰を海にまきたいと思っていますので、何か入れ物をいただけますか？」唯はすっかりと骨壺を指差し、職員に告げた。

職員はしばらく考えた後、こう答えた。「わかりました。すぐに手配させて頂きます。遺灰はどれくらいの分量をお考えですか？」

唯はしばらく考えた。そして答える。「この骨壺と同量くらいいただけますか？」

「わかりました」職員はなれた風にそう云うと、それから他の職員に連絡して、別の入れ物と、チリトリの形をしたシヤベルを持って来させた。「私がやりましょうか？ それともあなたがなさいますか？」

唯はしばらく考え、「家族のことですので、私がやらせて頂きます」と告げる。そして、兄に向き直り、「それでいい？ お兄ちゃん？」と訊ねる。

「あ、ああ、よろしく頼む」と云い、伊佐雄はなんとか意識を保っているという具合である。

「性がないなあ、言いだしたのはお兄ちゃんなのに」

どうやら、伊佐雄は株を下げた様子である。

「とにかく、入れさせていただきますね」と唯は告げる。

父も母も、そして親戚も、唯が丁寧に灰をすくって、四角い箱の中に遺灰を詰めていくの見守った。

「海に灰を撒く、か……なかなか考えてるな」と清叔父さんが先頭を切って、そんなことを告げた。

「すべて子供たちの意見なんだよ」と雄大は云った。

「父さんが愛されてた証拠だねえ」と清叔父さんは感無量と云う風に告げる。

「そうだな。嬉しいことだよ」

やがて、唯は入れ物に灰を満杯にした。

そして、「ありがとうございます」と職員に礼の言葉を述べる。

「遺灰を撒くというのは最近ではなかなかないことですが、確かに

昔はよく行われていたことでした。法律的にも別に問題はありませ
んから、堂々とお撒きになってください。お祖父さまもきつと喜ん
でくださることでしょう」

職員は角が立たないような物言いですんなことを告げた。

「ありがとうございます」と唯は云った。

帰りのバスの中で伊佐雄はまたも熟睡した。

唯と職員との遣り取りはなんとか聞いていたようだが、それから
あとのことは多分覚えていないだろう、と唯は思った。

あくまで私はお兄ちゃんの代理でこんなことをやっただけ。

唯はそう思っていたに違いない。夢の中の伊佐雄がそんなところ
まで思念の及ぶはずもなく。唯は肩をすくめて傍らの伊佐雄を
見た。

お兄ちゃんはずっと堪えきれなかったんだろう、お祖父を亡
くして、どうしようもない虚無の断崖の下に落ちてしまつて、もう
這い上がれないか。でも思ったに違いない。でも、こう云う風には考
えられないのかな。つまり、お祖父はなくなつたけど、まだ父さん
や母さん、そして私が傍にいるんだつてこと。それを忘れないでほ
しい。家族を思うそういう感情があるから、人はどんな悲しみでも
いずれ乗り越えることができるんじゃないかな？

唯は声を大にして云いたかつた。

お兄ちゃんはずっとじゃないんだよ。

私たちがいるじゃない。

唯はそんなことを思いながら、眠る兄の鼻尖をぴんとはじいた。

「う……うん」と寝返りを打とうとするも、ここが寝慣れた布団の
中ではないと知って、ハッと目を覚ます。起きたかな、と唯が思っ
ていると、兄はまた眼を閉じて、静かな寝息を立て始める。

唯はふつとほほ笑んだ。

何時までたつても馬鹿な兄貴なんだから。そう思つて、また
ほほ笑んだ。

祖父の遺骨を持って、氏寺である慈正寺へ赴く。

伊佐雄は横に唯の姿を見て安心し、講堂で正座して、和尚さんの来るのを待っていた。

「唯、父さんと母さんはどうしてこんなに大切な役目を俺たちに任せてくれたのかな？ それに関して、考えたことはあるか？」伊佐雄は疑問を口にした。

唯は思案の表情をしてから、ゆっくりと答えた。「んー、ううん、わからないわ」

「そうだよな、わからないよな。それなのに、自分の父である源祖父のことを俺たちに託した。しきたりから行けば、血の近い父達がここへ来るべきなのに」

「そう考えると、不思議ね」唯は肩をすくめた。

そんな会話をしていると、背後で戸の開く音がして、「お待ちせいたしましたな」と和尚さんの声が掛かった。

「すみません、お忙しいでしょうにお邪魔して」と伊佐雄は用意していた言葉を述べた。

「いえいえ、私共のところへ来てくださって、こんな嬉しいことはないですよ」和尚さんは伊佐雄と唯の真向かいに座を占め、そう云った。

「今日は、祖父の遺骨を持ってまいりました。これをよろしく願いたいします」

和尚さんは目を見開いて、伊佐雄が差し出した遺骨の入った風呂敷包みを凝視した。

「わかりました、お骨は当寺で預からせて頂きます」和尚さんの声は澄明だった。

「よろしく願います」と伊佐雄は丁寧に述べる。

「ところで、遺灰の方は、もう海に撒かれたのですか？」何故か和

尚さんは伊佐雄たちが海に祖父の灰を撒こうとしていることを知っていた。

「どうしてそれを？」と伊佐雄は怪訝そうな表情をして訊ねる。

「訊いたんですよ、雄大さんからね」

和尚さんはそう云って、ふつと顔をほころばせる。

「訊いた……んですか？」伊佐雄はどきまぎした。

和尚さんがあの日、葬儀で帰途につかれてからあとに、父にはその計画のことを話していた。時間的に和尚さんがそのことを知るの物理的に不可能である。それなのに、父に訊いたとは、いったいどういうことなのか？

しかし、その疑問は次の和尚さんの言葉であっけなく解消された。「お父様である雄大さんが数日前にこの寺を訪問なされて、その時に、いろいろ伺いました」

「そうなんですか？」伊佐雄は父がこの寺を訪れていたと聞いて、尚更、不思議に思ってしまった。いったい、父は何のためにここへ来たのか？そして、どうしてその時に遺骨を納めず、今になって自分達に祖父の遺骨を預けているのか？

「あの日、お父様には、ある種の説教をさせて頂きました」

「説教？」と伊佐雄は訊ね返した。

「もちろん、説教といっても、叱ったり、あげつらったり、あげ足を取ったりというわけではないですよ」和尚は云わずもがなのことを云った。

「というと、いったい、どう云うことについてなんですか？」

「水です」和尚さんは端的に答えた。

「水？」伊佐雄は変に頭を回転させて、その言葉の周辺を瞬時に七周ほどしてしまった。

「そう、水について」和尚さんは言葉を繰り返した。

「水と云うと、やっぱりあの、俺たちがいろいろと勘ぐっていた、祖父の雨水に関することですか？」伊佐雄は恐る恐る訊ねる。

「そうですね、そうですね」和尚さんは宜なった。

「ははあ。和尚さんはいまでは俺たちのことをお見通しと云う訳ですね」

「ふっふっ、そうなりますね」と和尚さんは嬉しそうに云った。「どうせですから、あの時、お父様に話させて頂いた話を、お子さんにもさせて頂くと致しましょうか」

伊佐雄はその云い方に、何か自分の意にそぐわない物を感じてしまつて、しばし、絶句した。「お父さんに話された内容を私達にもして下さるといふことですか？」伊佐雄は問い返した。

「そうですね、そうなります」と和尚さんは答えた。

「なかなか難しそうなことですが、拝聴させて頂きましょう」

「では、無礼を致します」「和尚さんはそう断つた。

伊佐雄は和尚さんの話を身を入れて、聴きはじめる。

「あなた方のお父さんは、子供のことをいつも思っている立派な父親である、私は思っています。そのお父さんが今回のお祖父さんのことでも心を痛められていたという話を聞くにつれ、私は、どうにかして、この家族に希望を持ってもらいたいとの思いをいだくようになりました。生者 残された人 は、死者 去つた人 を思つて、その因縁に引きづられるようにして、謂わば、蛇の道は蛇というような、絵にかいたような迷盲にかかつてしまうのが通例であつたりするのです。それは故人が引つかかっていた陥穽に、類縁のものが引つかかつてしまうという、謂わば、泥試合のよくな様相を呈するのです。しかし、あなた方のお父様は、そうはならなかつた。立派であると思います。尊敬に値するとまで思つております」

和尚さんはここで言葉を切つた。

それは、伊佐雄が質問をしたいと思つている気配を敏感に察知したからであつた。

「和尚さん」と伊佐雄は訊ねる。「祖父の引つかかっていた陥穽とはいつたい、何だったのですか？」

「それを語ると長くなりますが、訊かれますか？」和尚さんは油断

のない視線を伊佐雄に向けた。

「お聞きしたいです」と伊佐雄はそれに答える。

「そうですか、ならばお答え致しましょう」と和尚さんは続ける。

「お祖父さんは、水に関する事で、意識の大半を忙殺されていた、と云うことを、お父さんから訊いていました」

「そうですね、確かにそうかもしれませんが」と伊佐雄は云う。

「その水に関する話というのが、川の水であったり、海の水であったり、水道の水であったり、その時々で、いろいろなに変化したと聞き及んでいます」

「そうですね」

「その水の話の由来は、先に亡くなられたお祖母さんのときのことが大きく原因しているのではないかとの観念も、お父さんから伺いました」

「そのことは否定致しません」伊佐雄は和尚さんの言葉を肅々と受け入れる。

「私は水というものに関して、あなたのお祖父さんほど、強い思い入れは持っていません」

伊佐雄は和尚さんの話がどこへ向かおうとしているのか、まったく分からなかった。

「伊佐雄さん、あなたの心の中に水に対して希求する何らかの気持ちはありませんか？」

伊佐雄は即答した。「いや、ないですね」

「唯さん、あなたは？」と和尚さんは伊佐雄の脇に控えている唯にも訊ねる。

「いえ、私ありません」彼女はぼつりと答える。

「いったい、何が云いたいんですか？」と伊佐雄は若干の苛立ちを覚えながら、和尚さんに云った。

「実は申し上げにくいことなのですが、お祖父さんお祖母さんの意識は、ある業因に捉われていたと云いたいのです」

「業因？」伊佐雄は耳慣れない言葉に訊ね返した。

「つまり、悪因縁ということですよ」

「悪因縁」

「それがあるから、死者の魂は浮かばれることなく、混迷の大地をさまよい続けるといふものでしてね」和尚さんはまるで自分がその状況を目の当たりにしたかのような態度で伊佐雄達に告げた。

「なかなか難しそうですね」と伊佐雄は告げる。

「『因あらばこそ、果生ず』とでも云うべきものでしてね」

伊佐雄は和尚さんの話をじっくり聴こうとした。

「お祖父さんお祖母さんは水と云うものに心をとりこまれていたのではないかと？　つまり、水に心を支配されて、いまも苦しみの淵で水を求めているのではないかとそんなふうにも感じるんです」

「ならば、私たちにどうしろと？」伊佐雄はむきになって云った。

「あなた方の今回の申し出は亡くなられたお祖父さんにとって僥倖であつたと思います。つまり、救いの手が差し伸べられたとでもいうような。訊けば、海に遺灰を撒かれるという。それはいまの世では得難いことですよ、そういうことをして死者を供養しようとする遺族の方はなかなかいらつしやいません」

伊佐雄は和尚さんの言葉をしっかりと受け入れようとした。

「伊佐雄さん、唯さん、あなた方の行為が、お祖父さんの死後の苦しみを救うだろうと思っっているんですよ」

その言葉に伊佐雄が反応する。「死後の苦しみ？　祖父は苦しんでるんですか？」

「どうもそのようですよ。私の感覚によると、ということなので、それは私の師匠に見てもらわないと詳しいことはわからないのですが、水に関する事で苦しんでいるのは確かですよ」

「どうもよくわからないな」伊佐雄は肩をすくめた。

「とりあえず、遺灰を海に撒くことで解決する問題なんですか？」唯が我慢しきれずに口を挟んだ。

「そうですね。そうですね」和尚さんが返答する。

「そうですね」と唯。

伊佐雄はじつと黙っていた。そして思い定めると、伊佐雄は質問した。

「祖父の魂はもうこの世にはないんでしょう？ それなのに、残った遺灰を海に撒くか撒かないかで、祖父の立場が変わったりするものなんですか？」

「なかなか難しいことを尋ねて来られますね。しかし、考えてみてください。死者の魂がもうこの世にないからと云って、遺族が位牌に手を合わせることをまったくしなかったなら、どう思いますか？ それによって、死者の魂のレベルが下がって、怨念化することがあるのではないかと考えるのが普通ですよ。ちよつとたとえば、一般的でないですけど、とりあえず、供養というものは現世から死後の世界に向ける得難い功德であると思うべきかと」

「功德」伊佐雄は口の中で言葉を繰り返した。

「そうですね、この世に残されている人にとってもプラスになるし、あちらの世界へ行った人にとってもプラスになる仕組みです」
「なるほど」

和尚さんの話はとりあえず、それでひとまず終わりになった。

伊佐雄と唯は和尚さんに祖父の遺骨を渡すと、和尚さんはそれをうやうやしく持って運び、本尊の前に置くと、数歩下がって正座し、ありがたい経文をいくつか読経してくださいました。経文の言葉の逐いはわからないけれど、しっかりと響く、聴いているだけで心が洗われるような気持ちになる、そんな読経だった。

「お兄ちゃん」と唯が顔を寄せて、声をかけてくる。

伊佐雄はそちらへ耳を近づけて、妹の云う言葉を聞き取るうとする。

「遺灰を撒くって云う話、なんだか大きなことになっちゃったわね」
「そうだな」

「でも、これで筋もぴんと通って、あとは実行に移すだけになったというわけね」

「そうだな」

「さつきから、『そうだな』しか云わないのね」

「そうか？」

「まあ、いいわ。それで、撒くポイントは決めてるの？」

「ああ。篠草川が海に続いてるあたりで撒こうと思ってる」

「フェリーの上でとかじゃないのね」

「フェリーだと、いろいろとうるさいだろう？ だから、河口近く

に橋のある篠草川が一番いいポイントじゃないかと思ってね」

「なるほど」

「まあ、その話は後でな。いまはお経に集中しよう。でないとバチが当たるだろうよ」

「そうね」

読経が終わり、和尚さんが小坊主に指示して、番茶と和菓子を用意させた。

兄妹はそれをごちそうになり、そして、得難い話をいろいろ和尚さんから聞いたのだった。

一時間ほどの滞在時間が実際には何時間にも感じられるほどに、様々な話を聞いた気のする伊佐雄だったが、帰り道、伊佐雄の運転で助手席に乗っていた唯は、しばらく黙りこくって何か考えている様子だった。

「どうしたんだ？」と伊佐雄が訊ねる。

「うん？」

「なんか難しい顔して黙ってるからさ」

「ああ、ちよつとね」

唯はなんとも要領を得ない返事でごまかしている。

家に着くと、二人は何も言わずに別々の部屋に分かれた。

伊佐雄はリビングのソファに座って、しばらくじっとしていた。

そのとき、鳩時計が三時を知らせた。祖母が北海道へ旅行にいったときに買ってきた土産物だから、それはもうかなり昔のものとなっていた。棄てるに棄てられないものだといって、母がいつも話しているいわく付きの時計。伊佐雄もこの時計を気に入っていた。

鳩は鳩でも、この鳩は身体が黄緑色で、どちらかといえば、鷺時計とでも言うべきものだった。その鳥を見ていると優しい感じがして、またこの家の雰囲気を数度温めてくれるような感覚があった。

休みの土曜日、伊佐雄は唯に前もって知らせておいた。

篠草川の下流に架かる橋の西側に車を止め、そこから歩いて橋のなかほどに進んで行く。

伊佐雄は厳肅な気持ちに包まれていた。何か神聖な儀式をこれから取り行おうとしているとでもいうような。それは伊佐雄にとってももちろん、初めての経験であったが、こういうとき、遺族はなにか言葉を掛けたり、経文を唱えたりするのが普通なんだろうかと思われたが、今更、引き返すわけにもいかない。伊佐雄は遺灰の入れ物を橋の欄干に置いて、手を合わせ、拜んだ。

お祖父、これからのお祖父は水に悩まされることはないように、そして、お祖父がこの水を守ってくれよ。

そう心の中で念じて、脇の唯に目を向けると、唯も何か口の中で言葉を唱えていた。

伊佐雄は唯のつぶやきが止まるのをまつた。

言葉を唱え終った唯と目が合う。

「じゃ、いくぞ」と伊佐雄は云い、目の前の入れ物に手を伸ばした。蓋はきつちり閉められていたが、力をこめると、すっと開いた。伊佐雄は風の出てきた橋の下に向かって、灰を落としていく。まるで学校のライン引きの白い粉のように、それは風に流れながら、水面へ落ちて行った。

伊佐雄は入れ物がすっかり空になるまで、それを何度も上下に振った。

「これで、お祖父は浮かばれるのかな」唯が独り言のようにつぶやいた。

「さあな、どうだろう」伊佐雄は肩をすくめる。

川の流れは思ったより強く、祖父の灰はあつという間に向こうの

海に注ぐあたりへ流れて行った。幾分かは水面にただよい、幾分かは水底へと落ちていったのだ。自然と一つになったとでもいうのだろうか。伊佐雄はひとつのことを成し遂げたという達成感に背を押されているような気がした。

これ以上、もう自分がお祖父にしてやれることはない。あるとすれば、毎日欠かさず、仏壇に手を合わせるくらいだ。伊佐雄はそう思った。

帰り道、伊佐雄はまた慈正寺の和尚さんの言葉を思い返していた。水に対して抱いている印象は？ と和尚さんに尋ねられた時、伊佐雄はこう答えた。

『水は万物に恵みをもたらすけれど、ひとつ間違えば、大災害のもとになる。すべての生物に必要なだからこそ、それが不足すれば、皆渴してしまっし、多ければ多いで、洪水氾濫などで持て余してしまう。最も必要なものが、天国をも地獄をも発現させてしまうのは、因果なものです』

和尚さんはよく出来た解答を得たような表情をして、伊佐雄に云ったものだ。

『よく考えられた言葉です。水は友であると同時に、敵となることもある。まさにこれは人生と同じことだと思います。伊佐雄さん、唯さん、そのことを深く思念するんですよ。深く思念し、善行を為せば、必ず善果が生まれます。お祖父さんはこれからあの世でいると苦労され、自身の水の因縁を取り払うための行いを為されていくことでしょうか。そして、現世にあるあなた方も、同様に、努力して行かないといけない。でないとお祖父さんやお祖母さんと同じくらいの年になった時に、同じ因縁が立ち現れてくるでしょう。精進されることです』

和尚さんはそんな風に告げて、自身の話を終わられた。

「俺たちに何ができるんだろうな」と帰りの車の中で伊佐雄が訊ねた。

「んー、そうね」と唯の返事は心もとない。

「父さんと母さんは俺たちに好きなようにやりなさいって云ってくれるけど、でも、それってある意味酷だよな。少しでも自分の道に線を引いてくれれば、それを参考にして進んで行くことができるってものなのに」

「贅沢はいわない」唯はぴしりと云う。

「ははっ、そうか、贅沢か」と伊佐雄は声をあげる。

「ねえ、ちよつと咲浜公園にいかない？」唯が誘ってくる。

「うん、どうしたんだ？」

「うん、このまま帰るのもなんだか勿体なくって」

「でも、雲行きも怪しくなってきたし、これは降るかもしれないよ」

「いっそ、思う存分、降ってくれた方がうれしいわ。その方がお祖父ちゃん、お祖母ちゃんも喜ぶんじゃないかな？」

「そうか、なるほどな」伊佐雄は感心した。

伊佐雄は唯の意見を受け入れると、車をUターンして、咲浜公園に向かった。

公園についても、雨はまだ降っていないかった。

「噴水が涼しそう」と唯は秋だというのに、噴水の水受けに手を入れて、「冷たい！」と云っている。公園自体は野球スタジアムくらいの広さがある。曇天と云うこともあって、公園内にはそれほど人の姿はなかった。

しばらくベンチに座ってのんびりしていると、狙いましたように雨が降ってきた。

ざーっという降りではなかったけれど、しとしとと地道に降って次第に身体の体温を奪っていくような雨だった。

「当たっていると風邪を引くかも知れない、そろそろ行こう」と云うと、唯は神様でも仰ぐみたい、いまでは暗雲に支配された空を見上げた。

「お祖父」と唯はつぶやくように云うと、想いを振り払って、伊佐雄に従った。

車に戻って積み込んでいたタオルで身体についた雨滴をぬぐい去る。

そして何もなかったように車を走らせ、家についた。

「御疲れ様」と家族に迎えられて、伊佐雄と唯はもう一度、仏前に祈りを捧げた。

「お祖父、成仏してくれな」

伊佐雄はそう云って、唯と一緒に腰をあげた。

台所では母親が冷えた身体を温めるために、豚汁を作りはじめていた。

十（後書き）

完結いたしました。一気投稿ですみません。

この小説は去年の11〜12月頃に書いたものです。

新潮新人賞を目指していたんですが、これではだめだろうと思い、応募は見送りました。

サイトにあげているのは同じ文章ですけど、こちらのURLになります。

<http://sougen01.web.fc2.com/nov/nov10a/nov13600.html>

よろしく願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9916k/>

死と水

2010年10月8日15時31分発行